

昭和四十七年九月招集

第三回館山市議定会定例会會議録第二号

館山市議會

目次

日時	場所	出席議員	欠席議員	出席説明員	出席事務局職員	議事日程	開議	行政一般質問	辻田 実君の質問、当局の応答	君塚 喜三君の質問、当局の応答	渡辺軍治郎君の質問、当局の応答	石井 武敏君の質問、当局の応答	田村源治郎君の質問、当局の応答	栗原 一雄君の質問、当局の応答	散会
一	一	一	一	一	一	一	二	二	二	一四	二四	三二	四〇	四五	五二

一、昭和四十七年九月十一日午前十時

一、館山市役所議場

一、出席議員 二十七名

一 番	吉田 勇治郎	二 番	林 豊
三 番	流山 源次郎	四 番	鈴木 木
五 番	近藤 好雄	六 番	栗原 一雄
七 番	渡辺 昭夫	八 番	石井 武敏
九 番	辻田 実	〇 番	渡辺 軍治郎
一 番	山本 昇	一 番	藤田 益治
二 番	五十嵐 昇	二 番	伊賀 多朗
三 番	和田 一郎	三 番	辻井 謹爾
四 番	宮野 敏朗	四 番	安西 益男
五 番	君塚 喜三	五 番	鈴木 市蔵
六 番	田村 源治郎	六 番	西村 真次
七 番	安沢 徳順	七 番	望月 照正
八 番	田中 禄郎	八 番	秋山 六三郎
九 番	遠山 ヨネ子	九 番	
一〇 番	三 名	一〇 番	
一一 番	島野 茂樹郎	一一 番	
一二 番	飯田 義男	一二 番	
一三 番		一三 番	菊井 敏博

一、出席説明員

第一号に同じ

一、出席事務局職員

第一号に同じ

一、議事日程(第二号)

昭和四十七年九月十一日午前十時開議

日程第一 行政一般質問

開

議

午前十時三分開議

○議長（吉田勇治郎君） 本日の出席議員数二十五名、これより第三回市議会定例会第二日の会議を開会いたします。

本日の議事はお手もとに配付の日程表により行ないます。

行政一般質問

○議長（吉田勇治郎君） 日程第一、これより通告による行政一般質問を行ないます。

締め切り日の九月五日正午までに提出のありました議員、要旨及びその順序はお手もとに配付のとおりであります。

これより順次質問を行ないます。

この際申し上げます。通告質問者は以上のとおりであり、他に関連質問等の発言もあろうかと思いますが、本日は通告者のみといたします。

発言の方法は、最初の発言を二十分以内とし、執行当局の答弁は時間外、再質問は答弁を含めて三十分以内といたします。

これより順次発言を願います。九番議員辻田 実君御登壇願います。

（九番議員辻田 実君登壇）（拍手）

○九番（辻田 実君） 四点について御質問を申し上げたいと思います。

まず第一に、館山市内の小中学校の老朽校舎の現況と、それと

ともにこれからの校舎の建設経過についてお尋ねをいたしたいと思ひます。

現在、館山市内の小中学校の校舎の現況は、決してよい状態にあるとはいえないと思ひます。小学校十二校中鉄筋校舎といえましては北条小学校、そして神戸、現在建設中の館山、豊房といふことであります。四校が新しく鉄筋校舎になるわけでございますが、他の学校につきましては非常に老朽化し、わるい状態にあるのじゃないかというふうに思ひます。特に富崎、東小、神余館野、那古等におきましては、その度合いがひどいものと思われるわけでございます。

さらに、中学校におきましては、七校中昨年房南中学校の落成をみたのみでございます。あとはほとんど旧兵舎並びに木造の従来の建物を利用したものばかりでございます。

こうした状況は、安房郡市内をはじめ県下でも非常にわるい状況の中にあると思われるわけでございます。館山市におきましては、昭和三十九年頃に統合と鉄筋計画が審議されておりました。しかしながら現在このような建設計画そういうものはほとんど見受けられないようにございます。現在このような状況の中におきまして学校の建築計画はどのようになされておるか、お伺いしたいわけでございます。すなわち老朽校の校舎の建設にあたっては、どのような基準でどのような計画をもって現在建設に着手しておるか。お伺いしたいわけでございます。

特に、館山第一中学校におきましては、用地の確保がなされておりますが、しかし現在その建設の見込みがないように見受けられます。二、三年前から市長は来年度は一中を建設するといひ

ようなことが年々繰り延べになってきておるように伺っておりま
す。したがって、地元におきまところの不安は非常に高ま
ってゐるわけでございまして、このような状況はどのようにして
解決するのか。一中の建設見通しをはっきりさせていただきたい
と思うわけでございます。

さらに館山二中におきましては、せっかく不幸にも火災によ
り一部が焼失したわけでございまして、従来から建設計画という
か、建設の要望が非常にだされてゐる中におきまして、やはり二
中の建設も急を要するところでございますけれども、この見込み
はどうなのか。焼失によってプレハブによるところの仮校舎によ
って授業を行なつておるわけでございしますけれども、これらの
解決の見通しはどのような状況にあるのか。お伺いしたいわけで
ございます。

二番目に、乳幼児の医療費の三歳児までの無料化の問題につ
いてお伺いをしたいわけでございます。

本年四月より一歳未満の乳幼児医療費の無料化を行ないました。
そしてこのことは、市民の間に非常に好評を博してゐるわけでご
ざいます。県におきまして、来年度からこの乳幼児の医療費の
無料化に取り組むというような所信の表明が知事よりなされてお
ります。さらに国においても乳幼児の医療費の無料化という方向
が打ち出されてゐるわけでございます。

現在、千葉県下におきまして、県知事に対して三歳児未満の無
料化実現の直接請求が行なわれてゐるわけでございます。私もそ
の一端をになつてゐる署名活動してゐるわけでございます。する
けれども、非常にこの署名活動の中におきまして、市民の中から

本当にいいことだから三歳児まで医療の無料化をのばして早く実
現していただきたいという要望が非常に強く出されてゐるわけで
ございます。

したがって、館山市におきまして来年度乳幼児の医療費の無
料化を一歳から三歳まで引き上げる意向はないかどうか。この点
についてお伺いをしたいわけでございます。

三番目に、三芳水道の経営と、来年度財政負担の見込みにつ
いてお伺いをしたいわけでございます。

三芳水道につきましては、昭和四十五年度には二千五百六万円
の負担金をいたしたわけでございます。昨年はこの負担金が四千
九百万円と上昇しております。本年度の当初予算におきましても
四千八百三十万円の負担金が計上されてゐるわけでございます。

三芳水道におきましては、すでに給水を開始してから三年有余が
経ております。この間におきまところの累積赤字は一億八千万
円というようなことが巷に流布されてゐるわけでございます。そ
れから、毎年赤字は五千万ぐらいのものが見込まれてゐるという
ことでございしますけれども、この実態はどうなのか。

このような状況の中におきまして年々館山市におきまところ
の負担金が五千万前後のものが支払われていくということにつき
ましては、非常に大きな問題があると思うわけでございます。そ
れから経営的にもこの内容を分析して抜本的な解決をはかつてい
かなければならないと思うわけでございしますけれども、こうした
ところの負担金を納めていく見通しはどの程度続けていかなけれ
ばならないのか。その見通し等についてお伺いをいたしたいわけ
でございます。

四番目に、放送センターの開設の遅れとその問題点を明らかにしてもらいたいと思うわけでございます。

当初におきましては、昨年の予算審議並びに昨年八月の臨時議会への教育センター条例の決議の際には、四十七年四月より本放送ができるということが言明されておるわけでございます。このことにつきましては、中央新聞はじめ地方新聞にも大きく報道されたところでございます。本年の三月議会並びに広報二五三号に よりますと、六月から本格的に放送に入るということが報道されておりますけれど、今日までその放送には至っておりません。九月二日に放送センターの開所式が盛大に行なわれたわけでございます。しかしながら、今後この教育放送センターの本放送がいつ頃になるのか、はっきりとお伺いしたいわけでございます。

このように、非常に再三にわたりまして放送が遅れてきたということは、私は非常に大きな問題だと思つてわけでございます。現在の文明を集めたところの教育放送が、その計画どおりにいかないということ、そしてこのような遅れがどのような事情によりどのような問題があつて遅れてきたのか、はっきりさせていたいただきたいと思つてわけでございます。

そして、現在試験放送等を行なつておるようでございますけれども、当初の見通し等からみまして、まだ問題点は残されてないかどうか、お伺いしたいわけでございます。特に映像の面、技術的な面、さらには機械の性能の限界等、こうした面について多くの問題点が残されておるように見受けられるわけでございますけれども、これらについては、現在の見通しはどのように考えおられるか、お伺いしたいわけでございます。

さらに、この教育放送センターの開設にあたりましては、教育の地域格差並びに教師の労力の省力化等が、その基本になっておるわけでございますけれども、せっかくの放送センターの開所式の放送をみましても、なかなかこうしたところの問題の解決には無理があるのじゃないかというふうに思われますけれども、これらの点についてどのように考えておるか、お伺いしたいわけでございます。

最後に、前に申したとおり、当初は本年の四月放送の計画で作業が進められておつたわけでございます。それにもかかわらず、このような膨大な教育改革をねらいとしておるところの放送教育センターの職員につきましては、予算上その定数がゼロになっております。現在寄り合い世帯の八名の職員によって運営されておるといふことは、さきの議会におきまして明らかにされたところでございます。このような主要な教育放送を行なうわけでございまして、人事の安定、確保というものが十分なされておらないといふことはどういふことなのか。お伺いしたいわけでございます。将来この問題をどのように解決していくのか。来年度はどのようになされるのか。この点についてお伺いしたいわけでございます。合わせて、館山市におきましては、各課に定数並びにその予算が計上されておるところの職員があるわけでございますけれども教育センターには、若干名のものが教育センター以外の各課に所属しながら出向の形でもって現在その業務にたずさわつておるわけでございます。この状況は決してよい状況じゃないと思つてわけでございます。

このほかにも、こうしたところの職員が若干あるのじゃないかと

思われるわけでございます。たとえば、企画課におきますところの開発公社への事務職員の出向、こういう状況もあるわけでございまして、こうした職員が現在館山市にはどのくらいおるのか。その数、内容について明らかにしていただきたいと思うわけでございます。

以上につきまして御質問申し上げますので、よろしく御答弁のほどをお願いいたします。

(市長本問 議員登壇)

○市長(本問 議員) これから六名の方々の御質問に対してお答えをいたしたいと存じます。私の答弁で足りない部分につきまして、場合によりますと、関係課長から答弁いたさせていただきますので、あらかじめ御了承をたまわりたいと存じます。

ただいま、辻田議員さんから御質問の小中学校の建築計画についての御質問のようでございますが、まず現在一中、二中の問題について先に申し上げたいと思いますが、

二中のほうは、これは防衛庁の防音校舎として承認をされまして、現在防衛庁から設計費が交付されることに案内がきておるわけでございまして、二中のほうはなるべくできれば本年度内に着工いたしたい。さもなければ来年度から着工する。こういうことになるかと思いますが、防衛庁のほうではまんべんなく全国にそういうことをする関係もありまじょうが、大体三カ年計画で助成するということになっておるんですが、館山小学校もそういうことでありますが、どうも私はこのことについてはあまりいいことじゃないわけで、いろいろ防衛庁にいてもお願いしすけれども、全国的にそういうことをやっておるそうでした、まあ二中

のほうはやはり三年計画ということになるかと思いますが。

一中につきましては、すでにもう整地もできましたし、建てるばかりこういうことになっておるんですが、これもやはり防衛庁のほうに防音校舎としての申請をしておるわけでございますが、私も先月防衛庁に行きましていろいろ話したんですが、防音に該当するかどうかというものを試験してもらわなければならぬわけですから、それを早めてもらいたいと申しましたところが、夏だから今どたごたしているだろうから夏でも終わりましたら、ひとつやりましょう。こういうことですが、まず一中は騒音測定してそれが該当する。こういうことになれば、防衛庁の三カ年計画でいきますが、どうしても防音校舎に該当しない場合には、先般協議会で御了承いただきました現在の一中跡地の市の土地を処分してやれば、これはその金で十分できるじゃないかと思いますが、それでやれば一年間に建築ができると考えておりますが、もしいけなかった場合には、あれを処分した金で一中の校舎を一年以内に建てたい。いずれにしても、これは十二月までは測定ができると思いますが、どうしても該当しないということになれば、そういう方法で皆さま方に御相談してやりたいと存じます。

それから、中学の校舎は、神余とか、豊房とか、西岬ですか、四中というより順序でこれは改築をされなければならぬと思いますが、大体建築構想はそういうようなことで老朽校舎から順にこれやって参るわけでございます。

小学校につきましては、御案内のように神戸のほうは早くできましたし、北条小学校も一昨年ですか、あのようにできたわけでございますが、やはり小学校も神余小学校とかあるいは西岬の東

小学校、那古小学校、富崎、館野、船形ですか、そんなような順序で老朽校舎があると思いますが、やはりその老朽の度合いに応じてやっていく計画でございますので、御了承を願いたいと存じます。

それから、次は三歳児の医療費の無料ということのお尋ねでございますが、私は財政の許す範囲においてはまず幼稚園まで、五歳までやるべきだと考えておるわけでございまして、その次にはやはり財政事情やなんかを考えて小学校、最後には中学校、義務教育までは全部私は医療費を市費負担ということに考えておるわけでございますが、五歳児の医療負担については今検討しておりますが、先ほどお話しがございましたように、県でも一歳までは考えていく。

それから、来年の一月からは老人の医療費が政府のほうで持つ。こういうことになった関係もありまして、そこらにも多少の余裕ができるじゃないかと思いますが、そういうものや県の方針等をにらみ合わせて、この間事務当局に検討をさせておるわけですが、私は幼稚園まで、最初は幼稚園までを無料化する。次には小学校その次には中学、私は義務教育までを全部医療費を負担する。こういうことを考えておるんですが、日本でも福祉国家ということ、だいが今年あたりやるそうですけれども、どうも政府のほうはなかなか手がまわらなくて遅れがらでございますが、なるべく住民に対して予算の許す範囲において福祉施策を優先して考えていくつもりでありますので、御了承をいただきたいと存じます。

それから、三芳水道のことでございますが、あれは水道を設置するときに、私が船形のほうで非常に水が困って井戸を掘りやっ

こやってけんかしたり、船にも水がなくて困るということを前にも伺ったわけで、何とかして水道をやるうということと検討した結果、三芳、富浦に呼びかけただけでございますが、共鳴されまして、しかし金がないから水道は全部起債でやるうじゃないかということが始まり。

館山市としてもなかなか金がないから、やっぱり起債がいいというところで同意して、最初から起債七億六千万円ですかの起債を全部であるわけですね。ですから、自己資金というのは四千万かそこらでしょう。金を出してないわけですよ。普通の簡易水道ですと、国、県から金がきますし、案ですが、ああいう上水道は補助金がないわけですね。

しかし、私は水道事業というものは、何年かこらえれば必ずよくなる。こういうことで三市町村で協議して全部起債でやろう。水道のほうは全部起債を認めていただくわけでしてどんな事業でも自己資金が少なくても六割乃至七割なければなかなか成り立たないですね。しかし、水道のほうは二十五年というより長い安い利息で長い期間金を借りられますし、私の私設水道ですと利息が高いし、期間が短かいですね。金を借りても。

そういうことで、これはやり得るということをやったんですがただいま辻田さんが年々五千万ぐらいの欠損金ということで、これは私は欠損金とは考えない。つまり元を年々出しているわけですね。はじめ元を出さないから年賦で元を出すという考え方のほうがわかりやすいと思うんですが、経営において赤字ということじゃないわけですよ。

経営については収入、支出からみましますとですね、四十五年度は

起債と利息を除外した収入、支出を単年度で考えてみると、四十九年度は千二百七十九万九千円の黒字が出ているわけですよ。それから、四十六年度は一千二百二十九万程度の黒字をみておるんですが、四十六年度は、これはどうしてこれが少ないかというところ、八幡に給水区域をしてあそこに金が固定しますから利益率が少ないんですが、来年度は二千万円からのそういう面の黒字を考えておるわけですが、ですから、借金が一銭もないとするならば、こういう状態でいくわけですね。

そういうわけでして、大体水の需要も一割乃至一割五分ぐらい年々増加していますから、だんだんによくなってくるわけですが、来年度の負担金についても三、四百万円が軽減されるんじゃないかと思いますが、これに対して関係者のお骨折りによりまして、今日まで三千三百万ばかり県から三年間にわたって利子補給みたいになされておって、館山市分としても二千二百万市にきて、あとは富浦、三芳にいて三千三百万ばかり出ております。これで一応三年間は切れましたから、この間から知事に陳情してとにかく県営移管にできなかったならば、助成してもらいたい。こういうことを強く要望しまして、大体今予算の編成を県のほうでしてあります、やはりまあわかりませんけれども、一千万程度の助成金は必ず私はくるものと思っておりますが、どうしてもやはり将来は水の需要がふえてきますから、現在のような状況ではなかなか需要に追いつきませんから、県でも畑地区を調査しておるらしいですが、相当額の資金がなければ大きなダムやなんかでできませんわけで、どうしてもやはりまともに県立に移管するということが私はいいいじゃないかと、知事さんにも前に、この間申し上げました

が、売れなんということを館高を県立移管するときに、向こうから二回ばかり話があったんですが、あの当時は水道料金が県北のほうが高くて、館山のほうが安いからということをつた人がありますし、そんな関係かどうか知りませんが、うまくいかなかったんですが、私もこの間知事と会いましたよよく頼んだんですが、知事もよく承知しているということをいっておりますが、だんだんにやっていただくものと思っておりますが、私はこの水道はこういう状態ですけれども、将来はきわめて私はいいい事業だと思っております。まあ七、八年ぐらいこのようなんだん負担金が減るでしょうけれども、いい事業となることを私は確信しておりますのでございます。

いづれにしても、那古、船形あたりの水がないものをあれだけ今年あたりの日照りでも水をふんだんに使えたということはまことに私はそれ以上の値打ちがあるものと思つて、あのとき三町村で決断してやったわけで、住民の方、ことにあそこは港ですから船に供給する水がなければ港の価値がございませんから、いろいろ困難性もありますけれども、しかし地域住民の受ける利益は相当のものがあろうかと思つたので、しかしながら、なるべく負担をかけないようにいろいろ考えてこれからもやって参りたいと思うわけで、決して私は御心配のいらないものと考えております。

それから、放送センターのことでございますが、あれは御承知のように四月からおっしゃるようになれを開始することでおつたんですが、すべて設備は電々公社以外の設備は整ったわけでありましてけれども、電電公社のほうで何か新しい線の開発をや

ったために遅れたんですが、それはやはり映像がよく通ってよく映る。声もよく聞こえるということですが、新しく開発したのが手間どっている。特別つくったそうなのですが、その関係で延び延びになって、また七月頃から試験的のいろいろやられたそうでございますが、こちらのほうでなく電電公社のほうで、新しい線を開発してより以上いいものをつくるためにやったために、これが延びたわけでございまして、この点については私どもも本当に申しわけないと考えておる次第でございます。

それから、放送センターの職員関係、それから庁内の、辻田さんは出向というお話のようですが、たとえば、秘書課から教育委員会にいくとか、また農産課から農地委員会ですか、いくとかそういうようなこともありすけれども、私はこれは別に出向なんていうことでなく考えたほうがいいじゃないかと思いますが、従来もそんなふうにやっておりますので、しかしそのために仕事の能率が落ちるとかなんとかせずに、十分成果の上のように人事の配置をいたす。こういうわけでございしますが、今の教育委員会の関係につきましては、ひとつ教育長のほうから少し説明を補足をしていただきたいと思いますので、よろしく御了承願いたいと思っておりますが、どうも。

(教育長高木 正君登壇)

○教育長（高木 正君） 放送センター関係について補足申し上げます。
たいと思います。

電電公社のケーブル線の工事が終わりましたのが二月上旬でございます。それからセンターの中と、それから学校に電電公社関係で変調器、復調器をつけたわけでございます。これの取りつけが

終わりましたのが二月下旬でございます。それで、電電公社ではその後一番長い回線から独自の機械だけの、線だけのケーブル線だけのテストを始めたわけでございます。これが一番長い線のところをやりましたのが終わりましたのが、まず四月上旬でございます。これは四回線、四つの方向へと線が延びておりますので、ほかの四つの線は引き続いてやりました。これが終わりましたのが五月下旬でございますが、それから電電公社関係の機械と市独自で購入しました機械関係を、そのテストの終わったところから接続し、調整したわけですけれども、これが終わったのが大体五月中旬でございます。電電公社は六月に入りましたから回線の集中テストをしたわけでございます。それから、回線は四月上旬に工事が一応終りましたけれども、たとえば、そのうち実際に使ってみますと、話の漏れる線があったわけです。たとえば、九重のように話の漏れる線があり、一部張りかえということで音声特別回路これの検査が七月初旬終わったといったようなわけでございます。

したがって、私たちのほうでは七月上旬から私たち独自のテストを始めたわけでございます。同期信号、その他に一時的にぶれが起きるといので、また一部分の機械は電電公社が会社のほうに持っていてテストしておるわけでございます。このテストも近いうち終ると思うわけでございます。

私たちとしては、もう一つ現場に全面的に放送すると同時に幾つかの学校あるいは何人かの教師をモニターとして実際の使用と
いうためのテストを部分的に行ないたいわけでございます。

それから、職員関係でございますけれども、職員につきましては、これからそういったようなモニターテストも終り、それから

放映するところの教材も十分できてきますと、いよいよ本式の放送に入るわけでございますが、本式の放送に入ったときに職員の設定化というものを検討しなければならぬと考えておるわけでございます。以上放送関係につきまして。

〇九番（辻田 実君）　まず、第一の点について再質問をしたいわけでございますけれども、ただいまの答弁では、館山第一中学校の建設は防衛庁の計画に基づいて、その中で防音校舎としてやっていきたい。こういうことでありましてなんですけれども、この点についてはまだ不確定のわけでございます。

そこで、現在館山一中の用地買収にあたりましてかなり無理して協力をお願いした面があるわけでございまして、那古地域におきますところの土地提供者の中には、本年度にでも校舎が建つんじゃないか。こういうことでもって土地を提供しておりながら、防音校舎の認定を受けるまで云々ということでもって、現在その建設の見通しが不確定であるということについてかなりの動揺が起きているわけでございます。

特に、その用地が牧草地ということとウモロコシとか、そういうものが植えられてしまって、これはなにか市のほうからベテンをくったんじゃないか。こういうことまでいわれるほどに感情というんですか、建設経過に対する感情的のものが出てきておるわけでございますけれども、これらに対してはどのように考えておるのか、お伺いしたいわけでございます。

それからもう一つは、老朽校舎の度合いにより建設をしていくんだということをいっておるわけでございますけれども、確かに今市長さんがおっしゃられましたように、富崎、東小、神余、那

古こういう小学校はじめ中学校等におきましても、もう老朽化してしまってもうだめだ。甲乙つけがたい状態にあるのじゃないかというふうに思いうわけでございます。

そこでもって、本年度は何校、来年度は何校とか、そういうような形でもって建設計画というんですか、そういうものは立てられないのかどうなのか。そういう計画をお持ちにならないのかどうか。その点についてお伺いしたいわけでございます。

以上、二点について第一項については再質問いたしたいと思えます。

〇教育長（高木 正君）　まず、一中の跡に牧草を植えたいきさつでございます。これは川崎部落のほうから風が吹くたびに非常にほこりがたつていけないので何とかしてくれという申し入れがあったわけでございます。したがって、私のほうでは、学校建築ができるまでということで一時的に牧草の栽培についての協力を安房農高にお願いした。決して校舎建築を延期するための手段ではございません。以上です。

〇市長（本間 譲君）　現在やっています学校は豊房小学校でございますが、その次に二中、一中というようなことでございますがその後のことはまだ計画が實際できておりませんが、これは一つ検討して参りたいと思いますが、二、三年先になるんじゃないかと思えますが、今のところは豊房のほうの体育館と幼稚園を建て、小学校の校舎はできましたから、それから二中にかかって、二中がどうなるか、三年になると思いますが、一中も同時にかければかかる。こういうようなことでこれが両方やりますとどうしても二、三年はかかりますから、その後そのやっているうちにひ

とつ計画を立てて参りたいと思いますが、いずれにしても老朽校舍から順にやって参るわけでございます。今その計画ができておりませんから、これからその一中、二中をやっている間に検討したいと思いますが、よろしく。

〇九番(辻田 実君) 建設計画ができておらないということであれば、もう再質問の余地がございませんで、これらについては非常に憂える状態でございますので、いずれの機会に予算審議等をもって討論したいと思いますので、次に移りたいと思います。

市長さんは非常に義務教育まで乳幼児の医療費の無料化を進めていきたいということでございますけれども、ひとつよろしくお願いしたいと。県の実施が来年度等見込まれるような知事の証明があったわけでございますけれども、県において一歳児まで無料になるということが実現されますと、館山市の一歳の分は県でまるまる負担してもらいから、現在の予算というものは自動的に浮くというと語弊がありますけれども、浮く形になるわけでございますから、そうすればそれは自動的に二歳児なり、三歳児にのばしていても現在の予算内でもってそう無理なくいくんじゃないかというふうに思いますけれども、そういう方法が来年度取られるのかどうか。はっきりしていただきたい。

市長は、そういう方向でもってやっていきたい。特に老人医療の無料化というものが実現すれば、その分を振り向けたいということでございますけれども、それらについては来年度の予算等について県、国等と連絡しながら予算上の考慮は考えておられるのかどうか。その点について一応確認だけいたしておきたいと思えます。

それから、三番目の三芳水道の問題でございますけれども、概要についてはほほわかりました。しかしながら、市長さんはその中でもって、那古、船形、富浦地域において水が今年等はかなりふんだんに利用できたということをおっしゃられておりますけれども、実際のところ富浦地域等については夏季の間におきまして若干朝晩水がほとんど出ない状態になったという日が何日あったという苦情が出されているわけでございます。こうした状態はどういうことなのか、お伺いしたいわけでございます。

現に、三芳水道におきましては、二万人の計画給水人口というものが予定されておるわけでございます。現在のところ、この計画給水人口は一万二千人という対しまして、現在千六百四十六世帯五千八百という給水人口になっておるわけでございますから、計画給水人口から比べると半分に満たない。こういう状況の上に立って、現実に夏季等の非常に需要時については、一部地域についてはこのような支障が起きるという現況はどうなのか。どういふふうにみておられるのか。この点についてお伺いしたいわけでございます。

さらに、この三芳水道の料金が高いというふうにされておるわけでございますけれども、この点についてはただいま申しましたように、まだまだ給水量というのがかなり余っているわけでございますから、これらを埋め合わせる方法というものについてはどのように考えておられるのか。特に今、三芳水道は非常に高いというところでもって評判がわるいわけです。高いという面についてのまいりますと、その面では問題はあるわけでございます。

こういう点については、料金を高くして経営の採算ということ

よりも、まだ計画給水量というものが相当量余っておるわけでございしますから、これらの給水ということを広大するという中で、経営のバランスを取るといふ方向が打ち出されなければならぬのじゃないか。それにはやはり料金がかかり障害になつておるといふうちにいわれます。

どこに行つても非常に水道料金が高いのもつて、夏などはうっかりふろを毎日やるというわけにはいかないというようなことまで出されておるわけでございまして、かなり料金の高いことについて神経質になつておるわけでございしますけれども、こうした点については、もう少し配慮の方法はないのかどうか。この点についてお伺いしたいわけでございします。

以上、三点についてとりあえず御質問いたしたいと思ひます。

○市長（本間 譲君） 今、お話しの方の三歳児の医療負担関係でございしますが、これは前から幼稚園までを中心としていろいろ検討しておるわけでございしますが、なるべくそれを実現いたしたい。しかしながらやはり予算面やなんかもございしますので、いつやるといふふうに確答できませんけれども、なるべくできれば来年度からやるように、今検討中でございしますので、その点御了承願ひたいと思ひます。

それから、水道の水が余つて、水道の出がわるいということとはそれはあるわけですよ。それは八束の山の奥のほうで高いところをやつていますから、朝晩両方から水を取られますから、どうしても出がわるくなる。出ない場合も起きる。そういう現象があるわけですよ。しかし実質的に水は余っているんですから、ですからそこについて圧力でも加えて送るようになればいいんでしょ

けれども、そうもできないわけですから、使用することについて考へていただければ、水がなくて出ないわけではないんです。高いところによつたところがあるんですよ。八束のほうに。それは両方から引張られるから、どうしてもその地点が出がわるくなる。そういうわけでございします。

それから、料金が高過ぎるとおっしゃいますけれども、料金は全国でも二十番目ぐらいらしいですね。料金の額からいいますと高いほうから順にやると、しかしやはりそのときの建設費用やなんかで、補助金もございしませんから簡易水道のようなわけにはいかない。今はもちろん上げるわけにはいきませんし、また下げるわけにもいかないわけでございしますので、とにかくひねれば水が出るのだから、ひとつ御協力を願つていくことがいいと思ひますが、今千倉のほうで三町村かで計画しておる水道は、こっちはトシ六十円ぐらいです。八十円程度になるらしいですね。今の工事費からしますと、ですから高いといへば高いし、まあひねつて出るわけですから、また安いともいえるでしょうし、よそには安いところもあるわけです。つまりずっと前に建設したんですから、大体水道というものは簡易水道が多いです。安いところは。これは補助がきておりますからどうしてもそういうことになると思ひますけれども、三芳は上水道ですし、補助金なしでやつたわけですから、どうしても起債やなんかの返済も困難ですし、それで料金というものは認可を経なければ変更できないわけですし、あれを県、厚生省で検討されまして認可になつたわけでございしますので、こちらのほうはかつてにやつたわけではもちろんないわけでは厚生省なり、県のほうでいろいろここの情勢を判断してそれを

許可してもらおう。こういうわけでございますが、安いのにこしたことはございませんけれども、今のところ辻田さんのおっしゃる通りに安くするということは、また上げるといふこともちょっとできない。そういうわけでございますので御了承いただきたいと存じます。以上でございます。

○九番（辻田 実君） 水道問題についてもう一点御質問いたしたいわけでございます。

四十五年度、四十六年度におきましては、千二百万円前後の經常黒字が出たということでございまして、今年は一幡地区への施設の投資という面があるのであまり見込めないけれども、来年度は大体二千万程度の黒字が見込まれる。こういうことでございするけれども、現状のまま来年度については二千万円ということになりますと、ほぼこの黒字というものは起債の返還のほうにそのまま充当できるものになるのかどうか。この点についてお伺いしたいわけでございます。

黒字が出る、出るといっておりますが、現在館山市においては五千万円近くの年々の負担金があるわけでございますから、これが二千万程度の黒字がでてくるということになりますれば、七億六千万円の起債が二十五年返済でございしますから、かなりその負担部分というものが減るように考えられるわけでございまするけれども、この二千万の黒字というものは、そういう面に来るまゝる起債のほうに補てんができる可能性のある二千万円なのかどうか。この点についてお伺いしたいと思います。

○市長（本間 譲君） それはそのとおりでございますが、別に施設やなんかを特別事業でやるようなことがなければ、起債のほう

にまわりますから、負担金も減ってくることになります。

○九番（辻田 実君） そういう方向であればかなり見通しもたつと思えますので、そういう方向で努力を願いたいというふうに思っています。

教育放送センターの件について三点ほど再質問したいわけでございまするけれども、まず第一に現在のところ、非常に念をおすわけでございますが、三回目の公表になるわけでございますので、この放送の開設の時期は、来年四月ということとは本放送はほぼ間違いない段階にきておるのかどうか。これはこの前のときもそういう質問したわけでございますけれども、間違ひなく六月に放送できるということが先に延びてしまった。今回は三回目になるわけでございますけれども、そこらへんは率直のところいつていたきたい。あと半年先でございしますから、そこらへんの見通しを確答願いたい。

それから、二番目には来年度において、先ほどは本放送に入れ次第に定数化も考えているということでございまするけれども、来年度は本放送に入るわけでございますし、そういう面でもって来年度は定数化というんですか、これはどういう形になるかわかりませんけれども、ある程度現状に即したところの定数化をやるべく予算処置またはそういう努力をなされておるのかどうか。その見通しについてはっきりお答え願いたい。できなければできないというわけでございますから、その点は、はっきりしておかないと、やはり今後非常に支障をきたすと思えますので、その点を明確にお答え願いたい。

三番目には、現在九月二日に放送センターの開所式が行なわれ

まして、テスト放送も何回か行なわれておるように思われるわけ
でございますけれども、その面について先ほどはかなり抽象的な
御答弁であつたわけでございますけれども、具体的に映像、技術
面、機械の性能等からいって教育の地域格差さらに教師の労力の
省力化等については当初の目的どおりにいくのかどうか。か
なり問題点が出てきておるのかどうか。それらの点についてひと
つ率直に問題点を出していただきたい。

この前の開所式のときみますると、映像もかなり深くてありま
すし、時計が一つ出たわけでございますけれども、かなり楕円形
に写っておるのもあつたわけでございまして、理科の実験材料等
について相当の効果を發揮するということが報道されておるにも
かわらず、時計が楕円に写つたのでは、これは実験にも何にも
ならないという面で、かなりそういう面におきますところの性能
的問題点もあるように思われるわけでございますけれども、そ
ういう点についてテスト放送の実験の中でどのような点が危惧さ
れておるか。この点についてははっきり公表していただいて、来
年度の本放送の前の半年の期間の間にこれらの解決についてどの
ようにしていったらいいかという材料を提供していただくような
意味をおきまして、率直に出していただきたいというふうに思
うわけでございまして、以上三点についてお答え願いたいと思
います。

○教育長（高木 正君） まず第一点の本放送でございすけれど
も、何をもって本放送とするかというところに究明しなければい
けないと思つてございます。

電電公社のほうでは本放送という名前をついた時点で料金取り

たいわけでございます。

私たちのほうでは、できるだけテスト放送を長くして放送セン
ターと現場が機械の操作にもなれ、映像を十分利用できるよ
うになつてから本放送という名前をつきたいわけでございます。料
金もからまっていますので、そこにまだいろいろの複雑な面がござ
いますけれども、そういう電電公社との関係ではなくて、教育的
に役立つ状態というものはできるだけ早くやりたいわけござ
いますし、それもちょうど早く可能性が出てくると思つてござ
います。

それから、第二点目の放送センターに専従できる職員を定着さ
せべきだという面については、本当に御指摘がありたいわけでご
ざいます。現在八名おります。これは施設をつくる段階では社会
教育課、体育課、学校教育課との連絡が十分ありませんと困りま
すので、兼務でやっておるわけです。したがって、いよいよ私
たちの実質的な意味での本放送がルールに乗ったあかつきには
ぜひこれを定着したいわけでございます。ただ、実際に何名かと
いうことは、県費職員との関係もありますので、市の職員として
の定数がどうなるかと申しまして、少なくとも私たちは現在ぐ
らいのものが全体として県費職員をまけて定着が必要だと思つて
おります。

九月一日からは日立製作所から電気の技術者が一名当たりま
すけれども、これも一年間でございすので、それが過ぎたあかつ
きには電気の専門技術者がその定数の中に当然含まれてくると思
つてございす。

それから、三番目でございすけれども、これは一番目とから

まっておりますわけでございますけれども、当初の目的を達成できるかということについては、私たちその面についてはできると確信しております。

ただ、これも御指摘のとおり、あの日にはシンクつまりといまして、映像の上のほうが動揺してきたわけでございます。それから同期信号に問題がございますので、現在放送センターの中にある変調器のうち予備のものを池上の会社にかけていて原因は何であるかということ进行测试しているわけでございます。そういう意味におきまして、映像も近いうち私たちが期待するぐあいになると思いますので、できるだけ早く実質的な目的の達成できるような方向へと入りたいと思っています。

○九番（辻田 実君） 了解。

○議長（吉田勇治郎君） 次に入ります。

二〇番議員君塚喜三君登壇願います。

（二〇番議員君塚喜三君登壇）（拍手）

○二〇番（君塚喜三君） 君塚でございます。

私は、館山市における救急医療体制の現状について憂慮にたえないので、真の体制確立をはかられることを期待しながら、以下質問に及ぶ次第です。

ところで、館山市における救急輸送業務は、消防業務とともに安房郡市広域市町村圏事務組合の所管に移されたところでありますが、いまだ私から申し上げるまでもなく、救急業務こそは救急輸送業務とこれを受け入れる救急医療業務の両体制の確立によって始めてその使命が達成され得るのであって、その点からみたときに、当市の救急輸送体制は外形的には一応救急輸送体制

は確立され、その機能は成果をあげつつありますが、救急医療体制においては外形的には一応確立されながらも、特に夜間、休日等におけるその内容は、幾つかの事例にまつまでもなく、もっともその事例をここに公開せよといわれるならば、公開するだけの用意はございますが、全く寒心にたえないところであります。

ことは、人の生命にかかわること、何をさておいてもすみやかに救急医療体制の真の確立をはからなければならぬと考えますが、この点に対する市長の見解をまずお伺いしたい。

なお、本問題については深く掘り下げた説明の中から対策が打ち出されなければならないと考えますので、次の諸点についてお尋ねをします。

まず第一点は、救急医療体制のきわめて憂慮にたえない今日の状態に対して、根本的な要因はどこにあると考えておられるか。この点の把握なくしては本問題の解決は不可能だと思しますので伺いをしたいと思います。合わせてその見解の上に立つての今後の対策がお聞きしたい。

ところで、私は次のように考えております。この点に対する率直な所見をお伺いします。

私は、根本的な要因は究極において医師の絶対数の不足にあると考えております。もっとも、今日の館山市におけるこの面の姿をみたときに、ただ単に医師の数からのみきいていると断定できない要素のあることは一応認めます。

なぜならば、今年の六月の調査資料の上で、館山市と鴨川市を比較した場合、医師の実数において館山市が五十七名、鴨川市が二十七名、これを人口十万当りに換算したとき、館山市の百人

に対して、鴨川市は八十四・三人でしかない。ところが、鴨川市にこうした問題がないことを思えば、ただ単に医師数のみによらないことは一応うなずけるからであります。

それには、救急医療において最も多い交通事故による傷害患者に必要な外科医の数にも問題がありましようし、救急指定病院の規模にもありましよう。さらには医師のモラルの問題も大いにあると思います。しかしながら、科目別専門医のアンバランスの是正を考えてみても、また救急指定病院の規模の拡大の点を考えてみても、さらには医師のモラルの点を考えてみても、せんじつめるところ医師の養成とその間における医師専門科目の調整を含めましての絶対数の拡大なくしては、真の問題解決は不可能であるとの結論にぶち当たらざるを得ないのであります。

したがって、今や館山市における救急医療の問題は、市の事務レベルではどうにもならない段階にあり、政治的解決をはかる以外にはないと考えますが、さりとて、国、県に頼っていてはその解決は遅れるばかり。はじめにも申したとおり、人の生命にかかわること。また人ごとではない。いつ自分の身にあるいは自分の身うちにふりかかってくるかわからないことを思えば、問題の解決は容易ではないが、容易ではないからとて、避けて通れる問題ではなくて、すみやかに対策が必要だと考えます。

そこで、私は問題解決にあたって暫定的対策と恒久的対策、根本的対策との二つの点から次のように取り組んだらどうかと考えています。

まず、さしあたっての暫定的対策として現在の医師会病院をして真に救急指定病院にふさわしい体制をすみやかに確立するより

医師会に対し強く要請すべきでありましよう。

ところで、その実現には相当多くの費用を必要とすることが考えられます。これに対し、できる限りの市の助成もやむを得ないと考えています。ともあれ、医師会病院に対しては、設立時点にあたって大きな助成がなされた経緯をもっており、この点からも市民のためにこの要請を受け入れていいはずだと考えます。しかしこれとて、おそらくは万全を期しがたいと思われまうのでその上に第二点の恒久的、根本的対策として委託医学生制度の実施をはかつてはどうかと思います。

医師になるためには、優秀な頭脳の持ち主であらねばならないのはいうまでもありませんが、加えて莫大な学費を要することが医師誕生への隘路となっていることを思えば、市民から人材を掘り起こす意味からも、優秀な高校卒業予定者に対して医大受験を奨励し、これをバスすることを前提条件に毎年一、二名を限って市の職員に採用し、給与を与える上に、在学中の学費については特別の奨学資金をもって全面負担する。そのかわり、卒業後の研究業務に従事してもらおう。これぐらいの政治的配慮がない限り真の問題解決にはならないと私は考えます。なお、その付随的な問題として同じ観点に立って看護婦の要請も合わせて行なうべきでありましよう。

今や、市民の間から市営総合病院の建設をはかれとの強い要請が出ております。現状に於ては、けだし当然でありましよう。しかしながら、医師の要請これに付随する看護婦の養成なくしては総合病院の建築はできても中身の無い、あっても貧弱きわまりな

いものとなって、とうてい市民の期待にこたえられない結末を招くは必然と信じます。もっとも、総合病院の建物を建ててしまえば何とかなるという意見もありますが、以上の私見に対し、市長の率直な所見がお伺いしたい。

次に関連事項としてお尋ねをしますが、今日市民の間に交通事故による傷害に対する医療費がきわめて高いという声があがっております。なぜだろうかという疑問と、おかしいじゃないかという不満の声です。ところで、これらを裏づけるように、交通事故故には保険がきかないということが今や通念化している現況ですが、この点をどう考えておられるか。また交通事故と保険診療との関連について法的根拠の上からはっきりした見解をお伺いします。

なお、関連として二点ほどありますが、再質問の時点において行ないますことを御了解いただきたい。以上です。

(市長本問 譲君登壇)

○市長(本問 譲君) ただいま御質問の救急病院についてのことははじめのようでございますが、医療対策につきましては二年ぐらい前ですか、三年ぐらい前ですか、神戸で住民が危篤になったときに、お医者頼みに行ったけれどもきてくれないということであった。そういうことを伺ったんですが、まだほかにもあるでしょうが、人間最後に危篤になった場合にお医者さんがこられないということは、これ以上不幸のことは私はないと存じます。またそういうことがあってはならない。こういうことでございますが、それにつきまして、その当時医師会に終夜当番医をつくってそういう不幸な方がないようにやってもらいたいという申し出をい

たしました結果、ずっと前でも申し上げましたが、結局夜間になりましたと、先生方あるいは看護婦さんとか、運転手さんとか、薬剤師とかいろんな方が夜間勤務をしなければいけないし、特別の料金が必要であるし、そういうものを含めてあの当時一千二百万円の助成をしてもらいたい。こういう医師会のほうからお話しがあったわけでございまして、私はそれをもって知事さん、厚生省に行ったんですが、厚生省としては救急病院の指定についての助成は幾らか出しているけれども、そういうものについてはどこでもやってないからということで、厚生省のほうでは話にならなかったんです。知事さんに話しましたところが、知事さんは千葉県医師会と相談して何とかしよう。こういうことでございまして、その後知事さんと会いましたらば、どうもそういうことはいろいろの意見を聞いてもうまくない。こういうことで県のほうでも最初は部長やなんか考慮するということであつたんですが、知事は市長会長やなんかのいろいろ意見を聞いたらしいですが、銚子の市長会長は、あの人は医者ですからあの人あたりの意見を聞いたんですが、そういうことはあまり必要がないということをお願いしたいんですが、どうもそんな関係で県としてもそれについて助成は今のところは、そういうわけだからかんべんしてもらいたい。こういうことでございまして、その方法はできなかったんですが、私は県、厚生省のほうの助成をまっとうとは市で負担して医師会のほうに要望してやる方がいいじゃないかと当時は考えたんですが、そういうわけにいかなくなつたわけでございますが、さらに今度医師会の役員もかわりましたから、この間また新しく医師会について要望したわけでございます。

それはやはり、そういう不幸な人がないように、医師会のほうで交代でもいいから昼夜ひとつやれるお医者さんを心配してもらいたいということであって、そのまだ回答が医師会から、今度会長さんがかわったわけでして、その回答がきませんけれども、検討ということになっておるわけでございまして、いずれにしましても、自動車事故やなんかでけがした場合に何としてもお医者さんにみてもらうほかないわけでして、そのときにすぐにやってもらえないということば、こんな不幸なことはいわけてですが。

館山市においては、御案内のように救急病院としては伊賀病院山崎病院、館山病院が、三病院が県から指定されておると思いますが、そういうものを扱っておるんですが、いろんな関係もありましようが、引き受けてくだらないようなときには、どうかこちらの鴨川方面に行くという例もあるようですが、いずれにしても、これはお医者さん方の考え方がきわめて私は重要じゃないかと思いますが、昔はそういうことはないわけですが。

私は、ですからかかりつけの医者をみんなが考えておくことが一番必要じゃないか、かかりつけの医者ならば、いってあげれば必ず私はきてくれると思う。そっちかかったり、こっちかかったりしているとうまくいかない面があると思いますが、自分の主治医そういうものをつくるのが大事じゃないかと思っています。

今、安房郡市の広城市町村圏において、さっき君塚議員さんのお話のように救急業務をやっておりますから、救急病院の指定についていろいろ検討しようということと今進んでおりますが、各地に広城市町村圏でこういうような条件でやってもらいたいというようにことに表明して、やり得るお医者さんを指定をいたし

たい。こういうふうに考えておるわけでございますが、それは救急施設をあそこの消防でやっておりますから、そういう問題も起こるわけでございますが、本月中に開催されます広城市町村圏組合の協議会でいろいろ検討をしたいと考えておるわけでございます。

何といっても、基本的にはお医者さん方の考え方が一番大事じゃないかと思いますが、とにかく昔は「医は仁術」ということであったんですが、最近の世相はそうはいかない、面もありましようけれども、お医者さんによれば夜でも何でもきてくださる方もたくさんおるわけでして、そういう面もあるうかと思いますが、一日中働いて夜までやるということはおそらくたいへんでしょう。

最近、保険制度が普及してから医者にかかる人が多いですね。多いということは、私は早くからだをおすということではないと思いますが、あれをみていると医者を二軒も三軒もかけまわる人もありますね。そういうことは、やっぱり自分の信ずる医者を指定していることが万一のときいいじゃないかと思つてそういうことを申し上げておるわけです。

それから、医者の数が少ないから市で奨学資金を出して医者を養成したらばという御意見のようでございますが、私は医者の数は、それはさっきの君塚さんのおっしゃる比率からいうとそういうことにもなるうかと思いますが、ただ私はしろうとですが、専門的な医者が少ない。たとえ脳外科ですね。交通事故で頭をやられば、脳外科の専門医がいなければどうにもならない。そういう脳外科という専門医者が少ないと思いますが、そのほかはそんなに少ないじゃないかと思っています。脳外科については伊賀

先生もこの間お話しがあったんですが、千葉からすぐ呼んでやるというお話もありましたが、地元にあるということが一番いいわけですね。それについては医師会のほうでそういう先生をあそこに常駐させておいていただくことが一番私はいいと思いますが、何にしても、医師会病院はさっき君塚さんのお話しのごさいましたように、建設当時千二百万ですか、助成してある関係もありました。私のほうも医師会病院にいろいろ注文して皆さんに困らないような方法を取りたいということで連絡しておるわけですが、まず脳外科の医者がくればそんなに少ないといわれないうえに、ないかと思いますがね。

そういうわけですから、今の医師の学生を養成してというよりなことは今のところはやろうとも考えておらないわけですね。お医者さんになると十二年ぐらいかかるといわれておりますし、なかなか長い期間でもあるし、今のお医者さんがだんだんふえてくるでしょうし、政府でも特別の入学生をふやしておるようなことで、今君塚さんのようなことでやっていけば、医者のできる時分に医者がもっとふえてくるという結果にならないとも想像できますし、いずれにしても、市でそういう学生に助成して医者を養成するということまでも私は考えておりません。

それから、医療、交通事故の関係おっしゃると思いますが、医療費が交通事故には高いということでございますが、自分で自分をけがした場合には保険証を提示すればそれでできるですね。人によられた場合に加害者がそれを負担する。自動車保険もそういうふうになっておるでしょうが、そういうわけでして、しかしながら料金が安いということは、これはお医者さんのほうにもまた

伺ってそういうことのないようにやはり保険でやっていたくように、医師会のほうにも私のほうから要望をいたしたいと考えておるわけでございます。以上でございます。

〇二〇番（君塚喜三君）　ただいまの市長さんの御答弁からすると全く生命の、人の生命にかかわることだから、金なんぞでどうにもならない非常に重大な問題であるという認識が私はあるやなしや、非常に疑問を持つものであります。

と申しますのは、昨年の十二月の定例市議会において、私の水道行政についての通告質問の際にもただいまの千二百万という医師会負担の要請があったということば、その答弁の中にもいわれておりました。また今年の六月の安西議員さんからの公共医療施設の問題についての通告質問の際にも、さらにくわしく申し述べられております。

しかし、私に答弁なさったときから、もうすでに七カ月余の経過をみておるわけでございます。しかし、その間にも本当に残念いまわしい事例が幾つか発生しておることをご存じないでしよう。市長さんが全然この問題に無関心であるとは申しません。せんだつても、これは水田さんの国会報告演説会のあとの話し合いの席にも、水田さんに助成を要請せられたという報道がなされておりました。また同じ日に安房医師会からがんの診療車ですか、これを新しいのを買いかえるので、ひとつ助成してくれ。これは広域圏組合に対しての要請でありましたけれども、管理者が本間市長さんでありますので、あなたに要請にこられた。その際にも緊急医療体制の確立を何とかしてくれという要請がなされたということも新聞にのっておりましたし、しかし一向それに対しての

実があがってこないではないですか。

千二百万という額は大きいです。今も千二百万とは考えませんが、もっとおそらく多くの金を必要とすると考えておりますけれども、これとて、どうにもならないという額では私はないと考えます。なぜならば、今日市長さんは、あの谷藤原に五年十一億という金をかけてまで運動公園をつくろうとしていらっしゃる。

これとて完成のあかつきにはおそらく四千万や五千万の維持費はいるでしょう。そのことから考えてみてもどうにもならない額だとは考えていません。市民の生命を守ることができない。何の体力づくりか、何の福祉行政かと私はいいたいのであります。

実は、ただいまの市長さんの御答弁では、かかりつけの医師をつくっておけばいいというようなことをおっしゃいましたが、なるほど内科につきましてはかぜをひきました、何をしましたとちよいちよいきます。かかりつけの医者も私自身もっておりません。ところが、けがにいたってはそんなにけがをすることなんてないのが普通であります。かかりつけの医者をもっておけといっても、もっておくことができますか。よほど特殊の人でなければならぬと思います。ところが交通事故だ。こういう場合の医師というのは外科でしょう。このことはその問題解決には私はないと思います。

また、医者の数が主因ではない、こういう御答弁もありました。しかし、私はいろいろと検討をし、ずっとせんじつめて参りますと、医師数の絶対数の不足にあるならばこそ、国が今自治医大をつくろうとしておるが、ところが現在まだ二つしかつくることになっておりません。こういったことは、お医者さんが館山市に回

わってくるのは、それこそ気がほろーっとするほど気の長い話じゃございませんか。

交通事故なんか、こういうことをいっておる間にだってもうあるかもしれません。私が自身が帰る途中でないとも限りません。私に限りず皆さんお互いにそうであると思います。

ならば、できるだけのことは、もうさしあたってのことができることだけはやっておいて、その上にそれとて安房医師会の救急指定病院にふさわしい医療体制に確立するといえましたが、それをもつて私は万全を期し得られないと信じております。したがってその上にさらに根本的な対策が必要ではないか。

そこで、私はいろいろと考えたわけでありまして。私は実は一昨日ですが、ある医大に、私立ではありますけれども、有名校にむすこをやっている家にお訪ねして、費用などについていろいろ伺ったところでありまして、それによりますと、入学時に寄付金として七十五万円いった。これについては学校側として一人の医学生に対して年間百万円ぐらいの持ち出しなので、なにごんの寄付を願いたいということで、相場を考えて七十五万寄付しました。それはそれとして授業料、諸会費合わせて年間約二十五万、参考書代年間約二十万円、アパート一室を借りて食事は外食学校の食堂こういったところでおるのでそのために月約五万、年額にすると六十万、その他に医療費、雑費がいろいろの。こういうことであつたわけですね。それでみますと、年額合計額において百六十五万、医大は六年でございしますの、その六倍九百九十万円、この入学時の寄付金を加えますと一千六十五万、六年間で一千六十五万ということになります。成程個人としてはたいへんな

額です。しかしこれは私立ですよ。の医大であって、国立ならばもっと下回るものと私は思っております。

いずれにいたしましても、年額にしてみれば千二百万といたしましても、年額にすれば一人二百万ということで個人にしてはたいへんな額ですけれども、現在の館山市というものの予算規模からいってみてもそんなに至難の問題ではないんじゃないかと私は思っております。

それは、なんだかよそではせっかくこうして出してもらったところが、かかった費用を返してしまつてほかへ行つてしまつた。こういう事例もあるそうでございます。あるそうでございますが、はっきり申しましょう。順天堂医大です。ここには、東北のある県ということで、思い出そうとせられたけれども、どうしても思ひ出せないということであつたんです。県費で一人医学生がいる。それについては一・五倍の義務年限がついているんだ。したがつて医大は六年かかりますので、九年間は一人前の医者になつても他県に参るわけには参りません。その間金は払つたからいいということにはなりません。こういうことだそうです。

この義務年限というところに私はまだはっきりこれを研究いたしておりませんが、もしこの実例からしてみれば、それでもいいんじゃないかと思うわけでございまして、これでもって解決がつくということであるならば、医学生を養成する過程において専攻科目、専門医の専門についてこちらから要請するなりなんなりして、その調整をはかる。こういったことでもなければ根本的な解決は今のところできないでしょう。

それは、現在国の政策、生産第一主義から国民生活優先に切り

かえるとか、輸出優先を福祉優先に切りかえるとかいはありませんけれども、今いったとおり、自治医大をつくるといつてもまだわずか二つしかできることになっていないじゃございせんか。それでつくつたとて、先ほど市長さんおっしゃつたように、六年その上におそらく十年ぐらひは研究期間が必要でしょう。最低大年は医学博士を取るには六年の研究が必要だということもいわれております。そういう先のことをんです。非常に先のことでありますけれども、今いった暫定的な対策、こういった恒久的の対策の二つにおいてこれをやっていくということがなければとてもこの問題の解決にはならないのじゃないか。

絶対数が足りないならばこそ、こういったモデルという問題といたふようなことも生まれてくる。この二月には政府だつて医療費の改定問題のときには、どうにもならなかつたではないですか。ここまで医師がこういつたことに対して強硬であるということは結局は絶対数の少ないところにあるのじゃないか。私はそこに基づち当たらざるを得ないのであります。

まだたくさん申し上げたいこともありますが、もう一度この点について御再考いただきたいということをお願いし、医療費の問題でちよつとお尋ねするわけですが、加害者の責任だからとおっしゃいますけれども、交通事故の場合加害者が負担するのだというところでございますけれども、私この問題についてどう考えても交通事故には保険がきかないという問題は通念化してあるということを通告でやっております。法的に考えてどうしてもわからないのであります。

なぜ、交通事故には保険がきかないのか。それは自賠法の関係

もありました。責任は加害者にある。医療費を払うのは加害者にありましょう。その責任の度合いによって。

しかし、医療費の算定をも、保険診療とするということは、点数制でもって医療費を算定するということなんです。だとするならば、なぜその責任の所在においてその医療費が自由診療であったり、点数制であったり、点数制であるということと自由診療であるということには莫大の開きが出てくる。この点がどうしても私は納得がいかない。

時間がだんだんなくなりますので、私さらに関連としてもう二点ばかりお尋ねいたしますが、これから行なう関連質問はいずれも本通告質問書を提出後において知った事例であり、たいへん重要な問題でもありますので、あえて質問に及ぶわけでございますが、実は、先月の二十七日のことですが、私の同僚の一年生になる子供が激しい腹痛を訴え、しかも右下腹部の痛みを訴え、のちにあげた。もしかしたら盲腸ではないかという心配のあまり、日曜だったのである当直医に行った。ところが受付の窓口で休日は保険がききませんよと、しごく当然のことのようにいわれた。手遅れでもして子供の生命にかかわるとたいへんなのでそのまま治療を受けましたが、その帰りに提出しておいた国鉄の保険証について、これならきくそうですよとってこと足りました。こういった事例がある。こういったことは、保険がきかないということであった。実際その後知った事例でやはりそうでありました。日曜日は、休日には国民健康保険はきかない。こういうことがいわれるところがあるようでございますが、これも合点が参らない。この点合わせて法的根拠の上から御説明いたしたい。

さらにもう一点、救急患者に対する定義、救急車によって運び込まなければ救急患者として扱わないのかどうか。この点も時間がないので事例はさしひかえますが、御説明いたしたい。

法的根拠の上からよろしくお願いいたします。

保健課長（綱島憲治君） 事務的な面にわたりますものにつきまして私のほうからお答え申し上げます。

まず最初の交通事故に対して保険がきかないということでございますけれども、交通事故に対しても保険は、通俗的なことばで申し上げます。

ただし、通例的には交通事故の場合等におきましては、被保険者証を持っておらないのが通常でございます。したがって、医療保険の場合、被保険者証の提示がまず第一条件でございます。それがない場合には医療保険としての扱いはいたさないのが原則でございます。しかしながら、後日被保険者証を提示いたしますれば、提示した以後医療保険による診療が行なわれるわけでございます。

それからもう一つ、交通事故に対する医療費が高いというのが法的根拠からどうかということでございますけれども、今好ましいことではございませんけれども、自由診療と保険診療というのがございます。保険診療と申しますのは厚生大臣の定められました診療基準によって報酬の算定をするのが、医療保険の請求によるものでございます。そのほかに、そのものに属さないものが通常自由診療と呼ばれているものがございます。したがって、交通事故の場合これは保険証の提示がない場合は自由診療でございます。自由診療にはいわゆる尺度がございません。これは法律

的に全然ありませんので、医者のご自分の良心に従って請求がされるわけでございます。それで、たまたま高いとおっしゃられることに相なろうかと思えます。これは現在のところ規制のしようはないと考えます。

それから、休日における国民健康保険のきかないということでございますけれども、このことに関しましてはそういうことはないというふうに申し上げたいと思えます。それは何かのいき違いがあつたのではなからうかと思えます。これはこの人の場合、私ももうそういうふうなようにのことをしばしば受けるわけでございませけれども、このことにつきましては、私もといたしましては慎重に考えざるを得ないということでございます。

まず第一に、もちろん医療機関のほうにも聞きますし、ご本人にも聞かないと軽々には御答弁申し上げられませんけれども、実際問題はそういうことがないというのが原則でございます。したがしまして、もしそういう仮りに事実があるとすれば、何か誤解があつたのじゃないだろうか。こういうふうに考えます。

それから、救急車で運ばなければいづゆる救急患者として扱わないかということでございますが、必ずしも救急車で運ばれなくても救急患者であれば、あくまでも救急患者であらう。こういうふうに思います。以上であります。

〇二〇番（君塚喜三君） 一番最後から再質問させていただきます。

実は、これは過ぎた三日の一つの事例です。ということば船形のある七十四歳のおばあさんですが、深夜非常に腹痛を訴えられ、生命の危険を感じたというので、ある病院に問い合わせられたが、つれてきなさいということであつた。救急車を呼ぶよりは自分の

ところに大型車があるのでこれでつれていったほうが早いというので、すぐ乗せて病院に行つておられる。そうすると看護婦が出てそれを診察室のベットの上に運んだ。ところが医者が当日は日曜だったので、日曜の当直病院でありませんということを理由にして治療を行なわなかつた。あんた新聞をみていませんかといわれた。ところがその病院は救急指定病院なんです。もう前からそのおばあさんは土地の医師にかかつて筋肉痛だといつて診断を受けておる。これは誤診だからそれについてはとやかくは申しません。

ところが、もうかかつている患者を前にして日曜の当直ではございませんからよそに行つてくださいというので、よそに移された。よその病院でみたところが盲腸の手遅れでもつて腹膜炎を起こしてしまつた。こういう事例があるわけです。その病院が救急指定病院でなかつたならば問題はございません。そういうわれてもしようがないでしょう。日曜の当直病院ではないのでよそに行きなさい。本来ならば電話時点に、うちは日曜の当直病院ではございません。ここに行きなさいといつて教えてくれるのがあたりまえのことだ。それぐらいの親切心があつてもいいんではないかと思ひますが、それはそれとして、救急指定病院でありながらそういうった重患を前にしてよその病院に移す。こういうことから勘案してみても、私はそれが救急車で運んでいかなかったのが救急患者扱いをしなかつたのじゃないか。こうとしか考えられないわけなんです。だから、私はこの点について救急患者というものの定義をお尋ねしたわけなんです。いかがですか、この点もう一度。

〇保健課長（綱島憲治君） それで、たいへん遺憾なことではござ

いますが、確かにそういう事実であるとすればこれは全く遺憾なことだと思えます。事実を十分調査いたしましたして、しかるべくこれから以後のことにつきましては普処をいたしたいと思えます。

救急車で運ばなければ救急患者でないかということにつきましては、救急車で運ばれてなくても事態が緊急を要するものであればあくまでもこれは医者の主観によることとなりますけれども、救急患者であろう。こういうふうに考えます。

〇二〇番（君塚喜三君） もう一つ、先ほどの御答弁に対して再質問いたしますが、保険診療と事故との関係なんです、これはただいま主管課長からそういうことはありません。こういうことだったんですが、結局私の知る範囲では濃厚診療いわゆる殞死の重傷を前にして、点数は幾らかというようなことは考えておれない。したがって率直なことばでいえば過剰サービスをしてしまふ。そういうことに対して自後興の連合会審査会、ここにおいて審査をした結果、これはカルテから審査した結果、これは濃厚診療である。過剰サービスであると点数カットしてしまわれるとか、いろいろの問題があるようです。

先ほど厚生省や県から補助金が出るといふようなことをおっしゃったけれども、その補助金たるやどうでしょう。館山市においては四十二年一月六日指定病院の発令がなされておって、今日まで一貫して年額三万円ですよ。これでもって交代制の看護婦をしたり、それに対して深夜手当を払うことができるか。医師のほうでもそれはいへんなことだからしておことわりするといふ結果にもなつてこようかと思えます。

ともあれ、こういったようなことは、これは私にいわしてみれ

ばそういう不正を防止するんだ。ぶっかけてくるというようにこれに対しての不正を防止するといふところからも、連合審査会といふもののなしてあることであろうとは存じますけれども、そういう実態があるということがわかるならば、これは「角をためて牛を殺す」というそのたぐいではないか。これは政治的に解決はできない問題ではないんじゃないかと私は思うわけです。いかなものでしょう。この点、もう一度お尋ねをいたします。

〇保健課長（網島憲治君） いわゆる自由診療でやるということがチェックの関係にあるかの如きことでございますが、そのへんのことにつきましては私ども内容的にはわかりませんが、少なくとも私が最初に申しました被保険者証を提示すれば保険で扱うわけです。

その結果、それがたとえば真に現在の保険医療の中ではそういうチェックというのはそんなにはございません。したがって認められるわけでございますが、ただそこに自由診療というものの持つ何と申しますか、保険診療との違いというのは私はないと思うのでございますが、ただそこに金額的にかなり差があるといふことはこれは事実でございます。

そのことにつきましては、私もといたしましても、それをどのようにするといふことは、ちょっとできかねるというふうに私感じておりますけれども、と申しますのは、いわゆる尺度がないからということでございます。尺度がないからいわゆる規制の、たとえば、この注射は一本幾らだよという規定があればそれに従つて尺度があるわけでございますが、自由診療という名のものについては、そういうことがないことが自由診療でございますので

それはあくまでも先生方の、ことばが適切であるかどうかはわかりませんが、何と申しますか、そういうものに対する適当なことばがわかりませんが、いすれにしても高いということは存じておりますけれども、そのことについての是正の方法は、政治的と申し上げてもないのではないかと考えております。

〇二〇番（君塚喜三君）ただいまの点なんです、保険証を提示するから、しないからということで、われわれよくお医者さんに行きます。忘れて行くときもある。あとから持ってきてくださいよという、それをもって保険診療をやってくれるわけです。ところが、交通事故に対してのみそのようなことがなされていることについてはふに落ちないわけです。

まだ申し上げたいんですが、時間になりましたので打ち切らせていただきます。

〇議長（吉田勇治郎君）午前の会議はこれにて休憩とし、午後一時再開いたします。

午前十一時五十九分 休憩
午後 一時 三分 再開

〇議長（吉田勇治郎君）午後の出席議員数二十四名、休憩前に引き続き会議を開きます。

一〇番議員渡辺軍治郎君御登壇願います。

（一〇番議員渡辺軍治郎君登壇）（拍手）

〇一〇番（渡辺軍治郎君）私は、高令者医療費並びに乳幼児医療費の無料化の改善と、医療費に関連する予算との問題について、また谷藤原の山林買収に関する問題について質問いたします。

この九月十五日の老人の日に市長は老人憲章を発表することになっておりますが、その内容をみますと、老人をいたわろう。老人は愛されようといった道徳教育的なアピールになっています。

今までも老人を尊敬しよう。老人を大切にしようということはかなりPRされてきました。にもかかわらず老人問題が問題にされるのは、現実には老人が疎外されているからにほかならないと思います。したがって、老人が疎外される原因がどこにあるのか、この根本問題の究明が必要であると思います。

その最大の問題が一部の人を除いて老後の生活保障がないというところにあります。収入もなく、貯金もない老人が病気になる入院となると一カ月三万以上の入院費は子供たちの世話になるほかにありません。子供たちは、自分の生活に手いっぱいである老人の世話どころではないというのが実情であります。老人が疎外される原因が特に医療問題では深刻になっております。

そこで、七十歳以上の老人医療費を入院費、付添い看護料を含めて無料にすることが老人憲章の具体的な内容になるのではないかと思います。この点について市長さんはどうお考えになるのか。来年度から老人医療費の負担分これを国が三分の二、残り三分の一を県と市町村で負担しますので、市費負担分は六分の一となり入院費を見込んでも四十七年度予算の範囲内でまかなえると考えられます。市長は社会福祉を重点施策としておりますが、老人医療費を入院料、付添い看護料含めて無料化する考えがあるかどうか。お伺いします。

次に、乳幼児の医療費の無料化についてですが、本年の四月から零歳児の医療費が無料化になり喜ばれております。日本共産党

は六歳児までの医療費を無料にするよう主張しておりますが、当面三歳児まで無料化の年令を引き上げべきだと思いますが、どうでしょうか。

この点については、先ほど辻田議員からも提起されて、市長は幼稚園児までの医療費の無料化を実施したいというようなお考えが示されましたけれども、零歳児の医療費の年間どのぐらいかかるかということ調べてみました。四月から七月までの実績からみますと、年間約九十七万八千円の予算が必要のように推定されます。これを三歳児まで引き上げますと、約三倍の三百万円の予算化が必要になりますが、本年度予算には二百万円計上されておりますので、百万円の増しとなります。来年度から老人医療費の市費負担分が大幅に減じますので、入院費を見込んででも高令者医療給付扶助費と合わせて本年度予算の範囲内でまかなえるのではないかと考えられますので、この点御配慮をお願いしたいと思います。

次に、高令者医療費との関連で、予算上のことについて伺います。本年度予算の社会福祉費の中に高令者医療給付扶助費として一千五百万円が計上されております。また国保特別会計で高令者医療給付金として二千二百三十一万二千円の計上があります。このうち市費負担分は九百二十九万九千円になっておりますが、一般会計からの繰り出し金の受け入れがないので、この分は保険税にはねかえることになり、社会福祉を被保険者の負担に転嫁する結果になっております。この予算書は三月議会で決定になっておりますので、その当時問題にされなければならなかったものとは考えますが、あとでわかったとしても、予算編成上のミス

ではないのか。もしミスとすれば修正されなければならないのではないかと思います。いかがでしょうか。

次に、医療費無料化に伴う支払い方法についてですが、現在の支払い方法は、被保険者のたてかえ払いになっております。申請から支払いまで三重の手間になっているので金のない人や、遠方の人にとっては苦痛になっております。窓口でたてかえ払いしなくても済むようにという要望は切実ですが、市長は老人憲章からみて、この市民の要望にどうかえられるのか。お伺いします。

次に、谷藤原の山林買収に關してですが、これについては三回目の質問になりますが、七月二十五日の全員協議会で運動公園対策協議会の経過報告がありました。その報告では運動公園の適地として谷藤原を指定しております。ところが、開発公社の事業計画は、谷藤原分譲土地開発用地取得事業になっております。市長は谷藤原の山林をどう開発しようとしているのか、お伺いします。以上で、質問を終わりますが、あとは問題点を再質問の中で明らかにしたいと思います。

(市長本問 議員登壇)

○市長(本問 議員) 渡辺さんの御質問に対しましてお答えをいたしたいと存じます。

老人の医療費の問題は、福祉国家をとる日本国が一切これをするべきじゃないかと思いますが、なかなかそうはいきませんので、館山市におきましてはいち早く七十歳以上の医療費をまかなうことになったわけですが、その中で入院費を市費でまかなう。たうらどうかということですが、まことに私はもっとものことと存じますが、実は、来年の一月から政府におきま

して医療費を国の負担とともに入院費も国がやるようなことのようにでございますので、その際までひとつこれはお待ちを願いたいと存じます。

それから、国民健康保険の財源問題と申しますか、国民健康保険の財政から被保険者の老人の医療費を出すということはおかしいじゃないかというようなお話しのようでございますが、これはやはり一般会計からまわした金を国保のほうでそれを負担してやるわけでございますが、御承知のように昨年からですか、県のほうでは国民健康保険の財政でやった場合には、その半額を負担する。こういうような指示もあったわけで、昨年の六月でしたか、いつでしたか、そういう方法で御了承願っておるわけでございます。

また、お尋ねがないけれども、館山市においては社会保険と国民健康保険の両方の老人に対して市費負担こういうことでやっておるわけでございますが、よそでは国民健康保険だけのところもたくさんありますが、館山は全部の老人を対象としてやっておるわけでございますので、これは非常に私は喜ばれておるんじゃないかと考えるわけでございます。

それから、支払い方法につきましては、これはもう老人から直接いろいろ、並びに家族からも訴えがございましていろいろ検討しておりますが、やはり一月から国がまかなうときには窓口払いしないようにするような意向らしいですから、これもそのときまでお待ちを願いたいと存じます。

ただし、社会保険についてはいろいろつとめる場所によって給付の助成の額が二割とか、三割とか、いろいろやらないところも

あるし、そういう面もございしますので、政府においてもこれは検討中のようにございますが、まず健康保険の老人の医療費については、一月からは国がそんなことでやるから、市もそれにのっかって一月からはそういうふうにやりたいと考えておる次第でございます。

それから、三歳児の医療費の無料ということでございますが、これにつきましては辻田議員さんのときに答弁してございますが私は幼稚園までもやるべきだと考えておりまして、ずっと前から調べておりますが、できれば幼稚園から無料にする。その次には小学校、次には中学校、私は最終的には義務教育の子供まで全部を無料とすることが私の考え方でございます。

いずれにしても、こういうことばもと国が力を入れてやらなければならぬわけで、今度は福祉については相当力を入れろということでございますが、だんだんやってくると思えますが館山市におきましては、やはり財政の許す範囲において段階的に実施をしていきたいと考えておるわけでございます。

それから、谷藤原の土地の問題でございますが、元来開発公社は公共施設の土地の取得、造成こういうことで、まず公益的の市の使う用地は優先してやらなければならぬわけでございますが、谷藤原も市のほうで運動公園用地として皆さん方の御意見によって必要であるとすれば、やはり優先してそちらにまわすべきものと思えますが、この間の運動公園の委員会において位置設定のときは、あそこが適当だろうという御意見も出ておりますが、そういう考え方に立って皆さま方の同意を得てあそこで運動公園を設けたい。こういうふうに考えておるわけでございますので

よろしく御了承願いたいと思います。

〇一〇番（渡辺軍治郎君） 最初の老人医療費の問題ですが、市長さんの御答弁では、国がすべてこういう高令者医療費の問題をやるべきだということで、国が来年の一月からやるらしいので、それに合わせてというふうなお考えがありましたけれども、私は質問の中で、現在の予算の中でもまかなえるのではないかというふうに考えましたので一応計算してみんですが、四十六年度の高令者医療費は入院が七十五件ですが、七十五歳以上で市費の負担分は九百四十一万二千五百三十五円というふうに出ております。これは大体前年度の予算の範囲内でまかなわれておる数字であります。

四十七年度は七月までの月別計算からこれを一年間にのばしてみました。計算してみますと、七十歳以上の老人は二千三百十九人で、四十六年度の千二百四十人と比べますと約倍近い人数になりますが、この七月までの四カ月の平均を取って平均の市費負担分を調べてみますと、国保関係では二分の一を市が負担するとして八百八十一万二千五百九十六円という数字が出ます。

それから、社会保険のほうはこれは九百二十八万六千七百六十四円で合計しますと、一千八百九万九千三百六十円という数字になります。これが市費負担分になるわけですが、四十八年度の市費負担分が国保の関係では六分の一になりますので、これを計算してみますと、国保負担分は二百九十三万七千五百三十一円、社会保険の負担分が九百二十八万六千七百六十四円で、合計しますと一千二百二十二万四千二百九十五円という数字になります。

現在、市が予算に計上しているのは、老人医療費が一千五百万

の、乳幼児の零歳児の医療費が二百万ですから、一千七百万の予算が計上されております。入院はお年寄りの場合は七十五件になっておりますが、これは国保関係の入院件数でありまして、社会保険と合計しますと、この倍としてみて百五十件の入院件数とみられますが、月三万円とみて四十五万のこれの三分の一、さらにその二分の一、六分の一ですから七万五千円の市費負担になります。これを全部入院料社会保険の四十五万と市費負担分国保の七万五千円を加えまして、五十二万五千円の入院費があれば大体まかなえるということですから、千二百二十二万四千二百九十五円に、先ほど申し上げました零歳児を三歳児まで引き上げても約三百万円、それにお年寄りの入院費の五十二万五千円を加えましても千五百万ぐらいあればまかなえる勘定になります。

さらに、子供の入院状態をみますと、今まで四月から七月までで入院は二件でありますので、非常に乳幼児の入院は少ないというところで、これはそう大した金額にはならないと思われま

す。こういうふうにある程度数字を計算してみますと、大体現在予算にかかっている範囲内でもこれは来年度から国の負担金が三分の二になった場合の計算でありますから、市長さんがいわれるように来年度から国の高令者に対する負担金がかわれば来年度から実施したいというふうにいわれておりますが、これは予算上からみると予算をそうふやさなくても現在の予算でまかなえる数字でありますから、ぜひこれは来年度から実行してもらいたいというふうに考えますが、その点もう一つ市長さんにお伺いしておきたいと思ひます。これは零歳児の医療費をさらに三歳児まで引き上げましても大体年間百万円ですから、三百万円入れても現行予算

でまかなえると思いますので、老人医療費、乳幼児の医療費の改善について来年度から実施するということを、国の負担分が三分の二になった場合にはぜひ実行してもらいたいが、本場にそれが市長さんやる気があるのか。もう一回念を押して。

○市長（本間 譲君） 実際やってみますと、そういうわけにもいかないじゃないかと思いますが、いずれにしましてもあと何カ月もございませんし、正月からということですから、それまでお待ちを願ひまして、もし政府がやらない場合になつたらひとつ考えて市のほうでもやっていきたいと思いますが、今のところはこのままで御了承願ひたいと思います。

○一〇番（渡辺軍治郎君） 今の政府がやるということは、ただいま申し上げました三分の二国が負担した場合と考えてよろしゅうございますか。

○市長（本間 譲君） まあ、そうですね。

○一〇番（渡辺軍治郎君） 次は、一般会計と医療費に対する一般会計と国保会計との関係ですが、四十六年度の国保会計の予算書を見ますと、市の負担分が三百七十七万ですか、これが繰り出し金として出されて国保会計では受け入れがあるわけです。

四十七年度の予算書を見ますと、九百二十九万九千円というのは一般会計からの繰り出し分に相当する額が予算書には一般財源からまかなわれております。これでいきますと、保険税にはねかえていくわけです。だから社会福祉費を保険税で払うというよりなそういうことになっておりますが、これは一体どういうことなのか、予算編成時にどうして一般会計に繰り入れなかったのかどうか。その点はどういふふうにお考えになっているのか。お聞

きたいと思っています。

○保健課長（綱島憲治君） 事務的なことでございますので私のほうからお答えいたしたいと思ひます。

昨年度は年度途中で、県が国保の会計から支出いたしますればその三割相当額の二分の一を県費補助する。こういうふうな措置が出されたわけでございますので、年度途中でございまして一般会計から繰り入れいたしましたして措置いたしましたわけでございましてそういう制度になつた関係上、四十七年度からは国保特別会計の中で処置していく。こういうふうになつたわけでございします。

○一〇番（渡辺軍治郎君） 四十七年度の予算では、二分の一は社会福祉費のほうからこれは繰り入れることになるわけですね。

それが予算書にないとすると、その受け入れがないとすると、その分は保険税で支払わなければならぬという。こういう給付の關係が出てくると思うんですが、四十六年度は年度の途中で県が出すからというお話しのようにですが、当然県が出す分として予算書の中でも受け入れがあるし、四十七年度の予算書の中でも県や国が出す分が受け入れとして入っているわけです。市の負担分が入っていないので、その分が保険税にかぶるということになっておりますが、これはどういふふうにみているわけですか。

○保健課長（綱島憲治君） いわゆる国保会計の中で支出をした場合に県が二分の一補助するという制度になつたわけでございしましたが、昨年度は年度途中でございましてしたので一般会計からその分を繰り入れをいたしまして財政的な措置をした。本年度は四十七年度は制度がそういうふうになっておりますので、繰り入れをしないで国保会計の中で措置をした。こういうことでご

八外 加
ざいます。

〇一〇番（渡辺軍治郎君） そうしますと、一般会計から市の負担分が繰り入れしないということになると、その分が保険税にはねかえってくることになりますが、これをどういうふうに考えているんですか。

〇保健課長（網島憲治君） 制度がそういうふうになっておりますので、そのことにつきましては当然給付改善という形で県は出しておりますので、それはやむを得ないことだ。こういうふうに考えております。したがって、このしわ寄せというのは渡辺議員さんがおっしゃるとおりでございます。

〇一〇番（渡辺軍治郎君） この問題はですね。予算審議のときに十分討議されなかったということも一つありますけれども、六月にはすでに市の負担分が繰り入れされないまま保険税の値上げをしているわけですよ。当然これは保険税の値上げになっているわけですから、市から繰り入れべきものを繰り入れない。四十六年度は繰り入れておいて四十七年度はどうして繰り入れをしないのか。そのへんがはっきりわからないわけです。

〇保健課長（網島憲治君） 御案内のように国保の関係につきましては、年度途中での増徴ということが非常に困難でございます。したがって、四十六年度は年度途中でございましたので一般会計から繰り入れをして措置をした。そういうことでございますし、四十七年度は給付改善ということで県は補助金を出してあるわけです。国保特別会計の中で支出をした場合に補助するという形でございます。

四十六年度は先ほど申し上げましたように年度途中でございま

すので、一般会計から繰り入れをして措置をし、四十七年度は制度本来の姿にかえって国保会計の中で措置をした。こういうことでございます。

〇一〇番（渡辺軍治郎君） どうもわからないんですがね。国保会計の中で措置したということだと、これは社会福祉費関係ですね。老人扶助費を千五百万円計上してあるんですが、この中から国民保険会計に繰り出す分が含まれていると思うんですが、そういう点は四十六年度予算の中では二分の一の負担分は国保会計に繰り入れているわけですよ。

四十七年度の予算でこれを繰り入れなければ、その分は当然保険税の値上げにはねかえるわけですから、そういう点が四十七年度の予算討議のときに十分やられなかったもので、あとでそういうことが調べてわかったわけなんです。当然これは一千五百万円の社会福祉費の中から国保会計に繰り出すべきものだと思うんです。九百二十九万九千円という金はそれが予算を編成する場合になぜそれがやられなかったのか。年度の途中からそういうふうになったということでは理解できないわけです。

〇保健課長（網島憲治君） 四十六年は年度途中でございましたので一般会計から繰り入れして処置した。四十七年度は四十六年度の国保会計の中で給付改善という形でことはされたわけでございます。ですから、給付改善ということで国保会計の中から支出したもののついでに県はその二分の一を補助するというのがたてまえなんです。これが一般会計で出しますと補助がないわけです。四十六年度は途中でございましたので、一般会計の中から繰り入れをして措置をし、四十七年度は制度本来の姿にかえって特別会計

の中で措置をしていく。こういうことでございますので、必ずしも一般会計から繰り入れをして措置をすることが原則であるとは考えておりません。そういうことでございます。

○一〇番（渡辺軍治郎君） もう一つお伺いしますが、社会福祉費の中に一千五百万円の予算が計上されておりますが、これは国保と社会保険との合計した医療費の市費の負担分だと思っております。

ですから、当然この一千五百万円の中には九百二十九万九千円という国保負担が含まれていると思うんですが、これはどういうふうに国保会計との関係では処置されるんですか。

○保健課長（網島憲治君） 一般会計の中で千五百万計上額は、あくまでも一般会計で処置するもの。国保の会計の分につきましては含まれておりません。

○一〇番（渡辺軍治郎君） 時間がないので何かはつきりしません。その点も一と研究して次の機会にお伺いしたいと思えます。

それから、医療費の窓口払いの問題ですが、これは一般の人たち、金のない人たちそれから遠方の人たちが三重の時間をはらって非常に苦痛に考えておりますが、市長さんはこれをいつやるのか。先ほどの御答弁では国の負担金、補助がきまった段階でしたい。そういうお話でしたけれども、老人憲章の中では老人を大切にとか、老人をいたわろうとかそういうことをいっておりますが、実際問題としては窓口で払うことを非常に苦痛にしている人たちにとっては非常にたいへんなことだと思っておりますが、この問題であつたら市の努力によって、なにも国の施策を待たなくても医師会との関係では努力をすればできるはずではないか。近いところでは千倉あたりでは窓口で払わないで済むようになっていま

すが、この点の実施時期についてもっと積極的な考えがないのかどうか。それを質問したいと思えます。

○助役（畠山 伝君） これにつきましては国保会計と社保とあるわけでございますが、国保会計は一本化しておりますけれども、給付の関係は社保のほうにしますと、いろいろ給付関係が千差万別まちまちでございます。がために、いろいろ課内において施設に払わないで済むようなことはできないかというようなことについていろいろ検討しておりますので、そこで館山市のみではなかなかこれが実施困難なわけでございますが、国においてもこれは一応この制度は決定はされておりますけれども、その取り扱いについていろいろ検討しているようでございますので、そういう国の施策と考へ合わせてその方面を考へて実施していきたい。こういうふうに現在考へております。

○一〇番（渡辺軍治郎君） この問題は相当切実な問題でありますので、早く独自で解決しようとしても医師会との関係では、国の施策を待たないでもできるものだと思っておりますが、そういう点では市の努力が足りないように考えますので、こういう点はもっと積極的に働きかけをやってもらいたいということをお願いして次に移りたいと思えます。

次は、谷藤原の問題ですが、市長さんの御答弁では運動公園として市民が要望するならば、それをやりたいというふうなお話ですが、まだこのことは市長さんの腹としてははつきりまっていますのかどうか。そこらの点をお聞きしたいと思えます。先ほどの答弁では何かあいまいのように感じられますので、本当にそういうふうに運動公園をあそこにつくるのかどうか。そういう点は

まだこれからの段階だと思えますけれども、腹づもりとしてははっきり聞きたいと思えますが。

○市長（本間 譲君）　せんだゝの市会の議員の方々の委員会におきまして、あそこを適地として御報告がございましたから、それを尊重して将来運動公園としてやる考えでございますが、それには議員の皆さま方の御協力が得られなければできませんが、ございますので、ひとつよろしく御協力を願いたいと存じます。

私は、あれは、あの地所を五万坪ほどのものを急速に買ったことは私は非常に成功だろうと思えますね。その後ブローカーやなんか買って買戻したいというようなことであったんですが、あれがほかの人の手に移るとなかなか安い金では買われないわけでございますが、私はその点については非常にうまく取得ができたと考えておるわけでございます。

○一〇番（渡辺軍治郎君）　次に、質問しますが、あの五万坪の山林買収が全部買収が済んでいるのかどうか。聞くところによりますと、共有地の買収が一人判を押さないでできないようになっていると思いますが、大体この共有地は運動公園をつくるときに、どういう位置を占めるのか。それをちょっと聞きたいと思えます。

○企画課長（伊藤幸太郎君）　共有地の関係につきましては全部契約済みでございます。ただ、個人的に一人だけ調印がなされておらない面がございしますが、ほかにつきましては全部契約済みでございます。

○一〇番（渡辺軍治郎君）　その共有地の買収ができないと、運動公園をつくるのに相当支障に在るのかどうか。これをひとつ聞きたいと思えます。

もう一つ、市長さんは谷藤原に運動公園をつくりたい。こういうようなお話ですが、あそこに運動公園をつくった場合にだれが一体利用するのか。果してそれを待ち望んでいるような状態があるのかどうか。そういう必要性に応じて谷藤原に運動公園をつくらうとしているのか。

私は、館山市全体がいわば運動公園のようなものであるというふうにみております。横浜の保土ヶ谷に視察に行ったようであります。都市化されたところでは確かに緑を持ったそういう運動場の必要性は考えられると思えます。館山市の場合はいともっとスポーツセンターというような開発のほりがむしろ優先して今すぐ谷藤原に、あの山の中に運動公園をつくらなければならぬような、そういう実情かどうか。そういう点について疑問に持っておるわけです。こういう点はどうか考えておりますか。その共有地の位置の問題と今いった運動公園を果して館山市が必要としているかどうか。そういうふうな点についてお伺いしたいと思います。

○市長（本間 譲君）　これは、渡辺さんはそういう御意見のようでございますが、現在の市民行政ことに児童の面からみしても非常に子供さんは栄養はいいけれども運動が足らない。そして最近伺いますと、栄養がよくても運動が足らないから骨が曲がるような病気が出てくるそうです。この間も話したけれども、北条小学校の落成式において風通しのいいところに生徒代表が五十人ばかり立っておりましたが、十分くらいたつと半分くらいの子供が育くなつて倒れた。それを聞いてみますとやはり運動不足だといふんですね。これは子供ばかりでない。これはどなたにもいい

得ることだと思ひますが、今では非常に文化が進んでいろいろ行動するにも自動車で行ったりきたりする。農家にもみんな自動車がございますし、家庭も電化してありますし、農業をするにも電化みたいなことで昔のようにからだをあまり使わないですね。

ですから、なんかある人が、今から十年、十五年先になると国民の四分の三が医者がよいようになる。四分の一が健康体だといっておる人がおりますけれども、私もなるほどそうかなと考へますが、いずれにしてもここは大都會ではございせんよ。けれどもしかし、からだをきたえることは何ものにも優先すべきじゃないか。それにはやはりそういう場をつくらなければならぬわけで、まず明るく豊かな生活をするには、基本的にはやはり体力づくりということが大きくこれから考へていかなければならぬじゃないか。そういう意味において私はぜひとも皆さんの同意を得まして運動公園をつくらせて、市民に大いにアピールして、そこで運動するようにしむけていかなければならぬじゃないかと思ひますが、そういう意味において私はぜひともこれをつくりたい。こう思ひわけでございますので御了承願ひします。

○企画課長（伊藤幸太郎君） 共有地の問題でございますが、あの地域の中に共有名義が相当率として占めておりますので、場所的にいきましても共有地はぜひほしいということで進めまして契約したわけでございます。

○一〇番（渡辺軍治郎君） 共有地の買収ができないと運動公園をつくるのにも大きな支障があるようですが、もしこの共有地の買収が済まないとなると、運動公園をつくらうとしても実際問題としてもつくれないというようになると思ひます。

また、市長さんは運動公園をつくるという考へでPRをし、そしてこれから計画の段階に入らうと思ひますが、そうすれば終末処理場の買収とかあるいは当面市として必要な方向に使わなければならぬ金は相当あると思ひます。

公社は、大体市のそういういわゆる公共的な事業のかたがわりをするような、そういう立場で仕事をしておりますので、こういう問題についてはともっと慎重な考へが必要ではないのか。そういうふうに考へられます。

したがって、運動公園の問題はこれから具体化する上でいろいろまた論議になると思ひますが、そのときの論議にまた市民のそういう要望があるかないか、そういうものと合わせて討論をしていきたいと思ひますが、時間でありましますので、このへんで私の質問を打ち切らせていただきます。

○議長（吉田勇治郎君） 一〇番議員の質問を終り、次八番議員石井武敏君の質問に移ります。

（八番議員石井武敏君登壇）（拍手）

○八番（石井武敏君） 私は、通告してございましておりに物価問題特に食品に関する流通機構の改善というテーマを中心に質問いたします。

近年わが国の経済は飛躍的な発展と拡大をとげております。国民の所得水準は上昇して消費生活を中心として生活内容も著しく向上しております。

しかしその反面、経済の急速の成長の過程において消費者物価の高騰は各方面で問題視されて、特に生鮮食料品等の季節商品については上昇率が激しく、消費者に大きな影響を与えている現状

であります。この物価上昇に対し、国における物価対策が大きな課題とされており、反面各消費都市においては消費者対策として推進されようとしておるのが現状であります。

ここに、昭和四十一年から昭和四十六年に至る消費者物価指数をみてみたいと思いますが、まず全国平均をみますと、生鮮魚貝類におきましては四十一年一〇一であり、四十六年は二〇六と高騰しております。野菜につきましては九五・七から一七一、あるいは肉類は一〇九・四から一三九・四、また館山市内の物価指数の推移をみますと、生鮮魚貝類については四十一年は一・二四・四十六年一五八、野菜は一〇二・五から二〇四・三、肉は一〇三・一から一四三・七というようになっております。

このような物価上昇の要因の一つとしては、中間買取の多い流通機構の不完全さはみのがせないところのものであります。この流通機構が物価の形成さらには経済全体の効率化の上で果た役割は大きいとともに、地方の消費都市自体においても市場の近代化、合理化の遅れが地域の流通コストの上昇、ひいては物価上昇の要因となっているわけであります。

たとえば、千倉地区で産出された野菜が東京市場に出荷され、それが産地に逆入されているという悪循環もあるのであります。また、現在館山にあります市場では経済的能力からしても産地直送で大量仕入れに踏み切るには不可能なのが現状です。

ちなみに、市内の商店の仕入れ先を調査してみますと、東京市場、その他遠方からの仕入れは仕入れ総額の六〇%であると考えられております。これらの事実をふまえて私は生鮮食料品の価格安定には流通近代化、合理化に関する諸施策が根幹であり、卸売り市

場施設の計画、整備が急務であると考えます。すなわち物価の安定をはかるためには、生産、流通、消費の各段階におけるきめの細かい諸施策を総体的に積み重ねていくべきであると思います。このような観点から今後公設とする総合卸売り市場の建設の促進をはかっていかなければならないものであると確信するものであります。これに対する市当局の見解を伺いたいのであります。また、既設の市場の統合問題についてはどのような見解をお持ちか、合わせて聞きたいと思います。

次に、夏野菜の計画栽培についてであります。計画栽培事業の実施要綱によると、その目的が米作転換の一環として水田を利用して夏野菜を計画的に栽培し、市内における夏季の野菜を円滑に供給することを目的とするのとあります。また、計画栽培を行なうものは一部落内五名によって、同一野菜を栽培し、八月を中心に出荷することになっておるわけですが、これら季節商品の価格の不安定が消費者に対して大きな影響を与えておる現状からする物価安定策の一環として高く評価されているものであります。が、それらの計画栽培は期待されている収穫があがっているかどうか。この点をお聞きしたいと思います。

最後に食肉センターの設置につきまして、市当局の方向性を伺いたいと思います。これにつきましては、物価問題協議会の中でテーマとして論じられておりますが、いわゆる食肉流通構造改善の一途として食肉センターの設置を促進するとあります。これについて市当局の方向性を伺いたいと思います。

及び、鴨川及び館山と畜場合併についてはどうお考えか。以上の点等について明解なる御答弁をお願いします。以上です。

○市長（本間 譲君）

物価安定についての流通機構の統合という
ようなことであるようですが、これは昨年、一昨年頃からまず館
山市内の卸売り市場の統合についていろいろやっていたんですが、現
在のような卸の会社がこのままで統合したのでは、私は意味がない
じゃないか。とにかく資本をふやして少なくとも一千万円ぐらい
ふやさないさい。そうして統合してもらいたいと要望したんですが
なかなかうまく話がつかないわけでございますが、県においては
いろいろ計画を立てられまして、安房地方に一カ所でしょう。建
てるような案を考えておられるようですが、それは近く示される
そうですが、県で示された統合しないと補助金がこないそうでご
さいまして、県が示してきたらそれにそって極力統合をいたした
いと考えておるわけでございます。

それから、食肉センターをつくってはどうかということのよう
に思われますが、これは非常に大事なことでございますが、現在
の状態では一日に五百頭ぐらいつづきとるでないと認められな
いということであるそうですが、館山市では一日四十五頭ぐらい
のようでございますので、ちょっとむずかしいじゃないかと思
うわけでございます。

それから、計画栽培についてはトマトほか十三品目の計画栽培
をやりまして七〇何トかの生産を得たわけでございますが、現在
絶対量が館山市では足りないわけでございますが、それができた
としても、それによって価格を安定するとかいうようなことまで
も至っておらないじゃないかと思えますが、結局新しい野菜を需
要家に供給したというようなことが今のところではもうけものじ
ゃないかとおもっています、これから検討して計画栽培につ

いて効果あらしめるようにこれからやって参りたいと考えておる
次第でございます。

鳴川にはと殺場があるんですが、あれは私設のようなくとも聞
いておりますが、今そこを統合するということのような考え方はまだい
たっておりませんが、統合していいような点があるかどうか、こ
れから検討して、また県やなんかの御指示を得てやりたいと思
います。今のところはそういう考えは持っておりませんわけござい
ますので御了承願います。

○八番（石井武敏君） 何点か再質問したいと思いますが、はじめ
に総合卸売り市場の建設の段階的考え方としまして、既設の市場
についての、ことに今答えもございましたけれども、現在ある、
館山市内にある市場で卸売り市場法に基づいて整備していかない
ければならない市場に該当しているものが現在幾つあるか。また、
この法に定められている企画にあてはまらない市場は何年までに
企画にあてはまるようにしなければならぬのか。あるいはまた
どうしてもいゆる市場法に求める企画に整備していけない市場
はどういうふうになっていくのか。たとえば合併をして解決をし
ていくのか。あるいは国とか、県とか助成金をもらって整備をし
ていくのか。これが一点。

それから、先ほどもありました市場の統合問題ですけれども、
これは一つには、今まで何回か話し合いがあって今まで統合され
なかったという側面からそういうものを分析してみますと、いわ
ゆる対等合併というところに困難性があるのじゃないかというよ
うに思われるわけです。

たとえば、各青果市場に例をとってみますと、青果市場の売り

上げ高をみてみますと、一つのところは一年間に三億四千万、片方は一億三千万しか売っていないというように、売り上げのアンバランスが非常にあるわけです。売り上げに格差がありますから、そのためには市場の合併することによってこうむる不利益というものもを考えて合併というものがなされないのではないかと。このように思いますので、対等合併がそれ一辺倒では無理だと思っています。これは各市場の実力差というものをかみした対策というものはどうなのか。あるのかどうなのか。お聞きしたいと思っています。

それから、夏野菜についてですけれども、これは私は今回の質問に取り上げました理由は、本年のデーターをもって今度よりよい計画栽培を行なっていただきたい。こういう将来に至る参考のために伺ったわけであります。

もう一度、突込んで具体的に、たとえばどういう地域にどういう種類をやったとか、わかったとかそういう一たものをもう一歩くわしく教えていただきたいと思っています。

最後に、食肉センターの設置ですけれども、それに対して段階的に私は鴨川と館山のと場の合併というようにいたしましたけれども、先ほど答えてありましたように、この二つのと場が合併したことによって、そのままそれが物価の安定とか、枝肉の価格の安定というようには参らないのが常であります。これは御承知のようには芝浦で仕切られた相場が全国的に波及してきますから、非常に微妙なむずかしい問題があるわけです。

しかし、私が申し上げたい点は、これからはこういった殺場というものも広域市町村的な立場で、そういう単位で考えてやっていくべきではないか。取り組んでいくべきではないか。そういう

うように考えているんですが、その点いかがですか。

○助役（畠山 伝君） お答え申し上げます。

第一点の既設の市場の整備関係でございますけれども、これにつきましましては先ほど市長からも説明がございましたように、国の卸売り市場法、またそれに関連しての県の市場条例というようなものが改正されまして、県でいろいろその統合計画を進めておるわけでございます。流通対策課というものを新設いたしましたので近く決定次第に発表されるわけでございますが、まず県で考えますことは、県下で十五ぐらいの市場をつくらうということでございます。

そこで、その基準としますものは、大体地方卸売り市場で年間の取り扱い量が十五億円、それからまた人口規模が十五万程度というような一つの基準を示しておるわけでございます。そこで、一番大きい中央卸売り市場と地方拠点市場また補完市場というようなことばをつかっておるわけでございますけれども、中央卸売り市場につきましては千葉と船橋、地方拠点市場といいたしまして県下に八カ所というような案をもって現在検討中でございますが、大体これからいきますと、安房郡市で拠点市場一つ、館山市にというようになると、それから補完市場と名づけます鴨川市場これにつきましては一応将来はその補完市場も統合していこうというような方向でいっておるわけでございますから、この案にのっていません場合には現在のところでは何ら国も県も財政的な援助は今のところ見込めない状態でございます。

ですから、やはり市場を統合して規模を大きくして能率的にして流通機構を完備していく。このものに国、県が助成して大型化

していこうという方向でいっております。ですから、現在の既設の市場につきましてもそういう方向で考えて参らなければならぬと思います。

それから、いろいろ郡市一本あるいは市内業者の方々をお集まりいただきまして安房支庁でやり、また館山市でやっていると話し合いはいたしておるわけでございますが、原則としては皆さん賛成、了解はされるでしょうけれども、おっしゃるように対等合併と申しますか、今話がありましたように、そういうことでの問題はいろいろあるかと思ひます。それにつきましては今後とも話し合いを進め、県も強力にこれについて指導もし、われわれも検討して参りたい。こういうふうに考えるわけでございます。

それから、夏野菜の件でございますけれども、先ほども市長から申しましたが、これにつきましては市場で伺いましたところ、非常に鮮度の高い野菜を提供されたことは事実である。しかし、そのために物価対策についてその分があったためにどの程度の物価の変動と申しますか、あったかどうかということにつきましてはまだそれを数字的にあらわすには疑問があるということでございますけれども、とにかく逆入しないで、地元の鮮度の高い青果物を供給できたということは市場の方々も認められておるような状態でございます。以上でございます。

○農産課長（石井 謙君） 先ほどの御質問の中に地域別の種類というような御質問があったのでございますが、地域は神戸地区と九重地区を実施いたしました。この品目につきましては十三品目でございますが、一番多かったものはメロン、トマト、スイカ、甘しょ、レタス、ピーマンというようなものが主なものでござい

ます。総面積にいたしまして二九三アール、生産者の組合は全部で三十二名でございます。以上でございます。

○商工課長（鈴木 力君） ただいまの助役のほうから県の市場の計画の内容につきまして御説明いたしました。石井議員さん御質問受けました市内の卸売り市場につきまして整備していかねければならない市場は幾つあるか。こういう御質問でございますが、卸売り市場法に規定されております市場の整備ということにつきましては、いわゆる市場の規模の拡大と経営の合理化をはかる意味の統合の趣旨の整備ということでございますが、既設の市場の施設の整備という趣旨ではございません。

したがって、現在館山市には青果市場は二市場ございますけれども、もちろん施設の面につきましては市場としての機能を發揮しておるかどうかということは疑問があるわけでございますが、一応今後やはり公設の卸売り市場統合をお願いしまして、近代的な市場にしていこう。こういうことでございますが、したがって、該当するかどうかということは、当然整備、統合という意味では二市場とも該当するわけでございます。

それから、市場の統合の場合、いわゆる既設の市場の規模の格差によって対等合併ということで非常に合併の話合いの面において困難があるのじゃないかというところでございますが、特に今までも館山市における既設市場等の整備統合こういった問題が問題視されておるわけでございますが、県におきましてもそれらにつきましては新設される市場というものは原則として解散をして新しい会社を設立して、それによって整理統合をはかるというのが主眼でございます。一応そういう場合におきましては、既

設市場のいわゆる規模に応じた新しい会社の設置にあたっての資本構成というものについて配慮をしていくということで解決をしているのが県下の他の市場における統合の前提となつて県が調停をして、それらについて話をつけておるといふには聞いております。以上であります。

○助役（畠山 伝君） これは先ほど申しましたように、大体規模十五万、今安房郡市で十六万五千ぐらいですが、というふうなことで、これにつきましてはやはり広域市町村圏の中でもこれを取り上げてもらひまして、これは当然鴨川を補完市場にしる、当市を地方拠点にしる。これは各郡市の市町村にまたがることでございますので、ちょうど広域市町村事務組合という場もございますので、そうした中でも検討してもらひながら、市もこれを推進して対処したい。かように考えるわけでございます。

○八番（石井武敏君） ただいまの御回答で県のあるいは国そういった助成金を必要とする事業であるということで、そういったことはわかるんですけども、もう一步現実を市当局は注視していただきたいと思います。

それは、現在取り引きが行なわれております卸売り市場の事態をみてみますと、非常に、たとえば卸売り市場法でうたわれていゝる施設レベルが市場法でうたわれておりますけれども、そういったレベルよりはるかに低いレベルで現在行なわれておるといふ現実をもっとみつめてもらいたいと思うんです。

たとえば、青果物に例をとりますと、建物も非常に老朽化しておるところもありますし、また地べたにむしろを敷いて非常に不衛生の管理のもとに行なわれておるところもあるし、また自動車

の駐車場これも市場法でいろいろ規制されておるといいますけれども、全く完備されておらないところも現在あるわけです。

こういったところに、現実を直視した場合に市当局としての具體的な指導、対策というものが何か非常に緩慢であり、弱いように感ずるわけですけれども、この点についてお願いしたいと思ひます。

それから、合併問題ですけれども、これは原則的に業者も賛成であるという回答がかえつてきましたけれども、それならば市当局としてはもっと強いリーダーシップをもつて、それらを統合していくという意欲に燃えてしかるべきではないか。このように思ひわけです。合併問題については市場統合促進協議会費というのが本年度も二十万出されているわけですけれども、そういう点で何か市当局としては県の方針を待つとか、それに県のいき方に依じてやっていこうとかいふような姿勢が非常に強く感じられるわけです。

ですから、館山市としてはこりやるんだとか、館山市の構想としてはこりやるという自主制といいますか、主体制というものが私はほしいと思いますけれども、それに対してどのようにお考えになるか。お伺いします。

それから、夏野菜の計画栽培についてですけれども、これは栽培事業実施要綱の中に第四条の第二項に「生産物は原則として市内市場に共同出荷するものとする。」というようにありますけれども、この原則というものは果して現在守られているかどうか、これを聞かしていただきたい。

それから、最後の食肉センターについてですけれども、これは

ここに館山市営のと畜場のと畜実績数表がございすけれども、特に豚とか牛につきましても、ともにと畜数がダウンしているわけですね。たとえば、ダウン現象が非常に最近ひどくなっております。七月だけに例をとってみますと、七月の去年は七百十四だったのが五百十九にダウンしているわけですね。各月ともに大きなダウン現象を起こしております。これは当局としても調べがついていと思ひますけれども、これらのダウン現象を市はどういうふうにみているのか。対処していくのか。それをお尋ねします。

○ 商工観光課長（鈴木 力君） 既設市場のレベルの問題でございすが、市場の整備というのは当然のことでございますが、市内既設市場の現状からみましても、やはりできる限り早期に近代的な、合理的な卸売り市場の整備ということで、これを県の計画にそいまして推進することが最も急務でなからうかと思ひつてございす。この点につきまして、今後私どもとしましても県あるいは関係町村ともども実現するよう考へておるわけでございます。

○ 農産課長（石井 謀君） 市内の市場に共同出荷がまもられておるかどうかという御質問でございすが、これは生産者と私ども直接会いまして、こういうような実施要綱に基づいて一〇アール当たり一万程度の助成をおあげするというようなことで実施してもらっておりますので、市内の市場に出しておるといふことは、これは確認してございす。

○ 八番（石井武敏君） ただいまの回答で、第一点目の現在既設の市場の整備でございすけれども、これは市当局としても当然必要である。またできるだけ早い期間に整備していきたい。こういう基本姿勢を述べておりますけれども、何か対岸の火をみておる

ような、第三者的の感じをまぬがれないわけですので、もう一步深く突込んでお尋ねしたいんですけれども、それは市当局は、市内の生鮮食料品の卸売りあるいは小売り業者に対して、あるいは市内の市場等に対してその業務に対して含めて、あるいは施設の整備も含めて業務等に関して指導できる立場にあるかどうか。またそういう法的な根拠があるか。指導できるという法的根拠があるか。あるいは条例としてそういうものを定めなければそういう指導ができないかどうか。その点をお聞きます。

それから、夏野菜につきましてはほぼ了解いたしました。今後ともその方向性については拡大していく考えがあるのかどうか。これを一点お聞きしておきたいと思ひます。

○ 農産課長（石井 謀君） 今後の問題でございすが、私ども米作転換の一環として実は夏野菜を計画したわけでございすが、御承知のように水田というのはなかなか限られた野菜だけしか栽培できないわけでございす。そういうようなことからいたしまして、こういうようなものが今後市場等という話し合ひまして、できれば畑作のものも考へていきたいと思ひつてございす。

○ 商工観光課長（鈴木 力君） 市内の市場に対する市の指導というところでございすが、市場の指導につきましては当該市町村それからそれに伴う小売り業者あるいは卸売り業者に対して卸売り市場法がございまして、五十七条の地方市場の場合の開設の許可あるいは卸売り業務に対する、それからなお千葉県卸売り市場法におきまして二十四条において市場施設の改善と業務の改善勧告、こういう規定がございまして、そういう点からいたしまし

ても、当然県が全面的に市場を指導、監督あるいは助言とへうものをいたすものである。こういうふうに感じております。

ただ、公設市場の場合におきましては、当然開設者が市町村といたうことになりますので、その場合におきましては卸売り業者等に対しまして、その業務の内容等につきまして当然市町村が指導助言をするということになるわけでございます。

○衛生課長補佐(佐山市太郎君) 食肉に供すると畜数のことについでのことでございますが、確かに石井議員さんのいわれるとおり現在減少の道をたどっておるわけでございますが、これは生産関係のことでございますので、養豚組合あるいは食肉組合等と協議いたしまして善処して参りたいと思います。

○八番(石井武敏君) 市内の既設の市場に対する整備は、市当局はもっと積極的にこれを研究して取り組んでいただきたいと思っております。

私の今回の質問のテーマの根本は、公営の卸売り市場を開設していく意図があるかどうか。そういう方向性があるかどうかということなので、もう一度深くそれに関してお聞きしておきたいんですが、卸売り市場法の施行令第二条には卸売り市場に売場面積のつております。これは御承知だと思えますけれども、またそれらの最低面積が定められておりますけれども、これに自動車駐車場等を含むとかなり広範の土地が必要になってくるわけですねけれども、そういうような理想的な候補地が館山市を中心として見当たるかどうか。あるいはそれらの検討が今までなされたことがあるかどうか。この点をお聞きしておきたいと思えます。

○商工観光課長(鈴木 力君) 計画に基づきます卸売り市場の施

設の規模の問題でございますけれども、具体的にはまだ候補地を検討した例はないわけでございます。ただ、御指摘のように施行令にございます売場面積からみましても、総合卸売り市場ということになりますと、駐車場等を含めまして相当広大な面積を有するということになります。県下の最近整備されました市場をみましても相当の面積を要しておるわけでございます。県におきましても約一万坪程度を必要とするということに伺っております。

○八番(石井武敏君) 私は、日頃から物価高に悩まされておる市民の代表として一言市当局にお願いしておきたいんですけれどもこれらの物価対策の、特に流通機構の改善の問題につきましてはもっと市当局の根本的な取り組み方といえますか、それが必要であるかと思えます。また、市当局としての明確な構想というものをもっと持つべきではないか。このように思ひ次第でございます。ですから、統合問題から発展しましていわゆる卸売り市場の開設ということになるんですけれども、これらにつきましても、現在先進的に行なっておる地域が千葉県内にもあるわけですから、そういうところのすみやかに視察をするとか、積極的にそういうものに取り組んで、県の一方的な返事を待つというのではなくて館山市独自ですね。このようにしていきたいというその方向性というものを県のほうに示すというような強い姿勢が望まれるわけです。

どうか、市当局は、これから物価問題に悩んでいる市民の声というものを大地に耳をつけて聞いていただきたいということを切望しまして、私の質問を終ります。

○議長(吉田勇治郎君) 暫時休憩いたします。

午後二時二十三分 休憩
午後二時三十六分 再開

議長（吉田勇治郎君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

二二番議員田村源治郎君御登壇願います。

（二二番議員田村源治郎君登壇）（拍手）

〇二二番（田村源治郎君） 私は、八番議員と同じ質問の中に内容の違ったところをちょっとお聞きしたいと思います。大体八番議員がお聞きしましたから、この食品、鮮魚、野菜小売り市場の建設については行なわれたとおります。

今、館山市において、館山は卸売り市場もなく、また小売り市場、市が補助として建設して小売り市場は市の全面的指導と施設は全然なくして、衛生的な食品の扱いを常に起こして不安定な生活を営んでいる次第です。私的市場は野菜あり、また鮮魚のものもありますけれども、これらについて私は館山市の物価協議会、物価安定協議会をやったけれども、その効果の実効についていかなる実績をあげているか。

二点は、当市は全面的物価対策に対していかなる考えを持っているか。

それから、三点は、現在生鮮食料品衛生対策はいかに考えているかと。

それから次は四点、館山市の鮮魚協同組合というものをこしらえて、荷請け業務の類似を行なっている。その魚市場に対して指導と補助的なことをいたしておるか。

五点は、館山市鮮魚、野菜生産者に対し、館山市の生鮮食料品に出荷協力方を市は指導して補助的のものを行なっているか。

次は、六点でありますけれども、公認生鮮食品市場をつくる考えがあるとするならば、木更津市場は六万五千の市である。それらについて十五万都市は農林省のものであると。館山市が木更津の市場がつくって、館山市の六万の市場はつくないわけはない。市の答弁には相当疑義の点があるけれども、その点をお伺いいたします。（拍手）

（市長本間 譲君登壇）

〇市長（本間 譲君） 田村さんの御質問に対してお答えいたしましたと思いますが、これを要約してみますと、物価に対することのようにございますが、物価については皆さ方も御承知のようにこれは需要と供給の関係が基本的のものであると存じます。

つまり、たくさん魚が取れば安くなるし、魚がしけやなんかで取れなければ値が上がる。これは自然の法則でございまして、館山市の場合は海岸でありますけれども、魚が余るほどあがるようなことはないじゃないかと思いますが、野菜にしてもそういうこともいえるわけでございますが、一面においては魚がたくさん取れば東京市場に出荷する。野菜もそういうことで地元がいいあんばいになれば供給をされておらないじゃないかと考えるわけでございますが、物価を安定させることは政府のほうでもやっておりますけれども、なかなかこれはだれがやっても物価を引き下げるといふようなことはなかなかできないじゃないかと思いますが、とにかくこれは一面には、わが国の経済の情勢からしましても賃金も上るし、物価もそれに比例して上っていくようなことは、それだけ国力があるから、それに比例して上ることならばいいんですが、これがそうでなくインフレ的なことであれば、これは警戒

しなくちゃならないと思いますが、物価を本当に安定するということはだれにもなかなかきめ手がないと思いますね。

私にいわせるならば、まず賃金と物価を五年間ぐらい押えつけておけば上らないわけですね。こういうことはできないわけですよ。もしそういうことができれば賃金も上げない。物価もこの価格で上げないということになれば、この間においてあまり手数料を取るようなものは基準を定めて引き下げるということもできるけれども、このままでは賃金は上げます。公共料金も上げます。

いろんな関係でどうしても物価が上っていく。また賃金を上げる。いちごっこのようですね。これはなかなかきめ手がない。たくさん品物が取れる。生産されれば値段は安定していくし、そうでない場合にはこれは上っていく。これは自然の法則で田村さんも御承知のとおりであるわけですが、しかしそうだからといってこれを放置するわけには参らないわけでごさいます。物価対策協議会ができておりまして、この方々は非常に熱心に物価問題と取り組んでおられまして、あれをつくった当時はちょうど夏前でしたから、夏物価の安定をはかることを一つ検討しようということでおやりくださったんでしょうが、そのときは市民に夏物価をなるべく上げないように協力方を頼むというようなことでピラヤなんかをつくって啓蒙したわけでございますが、その後あの対策委員会の方々から議長さんのところにも出たでしよすが、やはり市場の統一ですね。をしてもらいたい。それからまた、いい買い手の勉強をしてもらうことも必要じゃないか。これについてはいろいろ野菜なんかにも一級、二級、三級というようなこともあるんですが、一級の中に三級の品物を入れたりして売っているようなと

ころもあるそうですが、そういうところもそれらの買い手側で検討してかえていかなければならぬというようなことのようにでございますが、それから計画栽培をしていたきたいというように三つの物価対策委員会のほうから要望が出ておるわけでございますし、それを基本としていろいろ対策を講じていかなければならぬということやっておる次第でございますが、なかなか物価問題としてむずかしいですね。

私は、こういうふうにも考えたことがあるんですよ。大きな冷蔵庫を鮮魚と野菜の冷蔵庫をつくって、この間野菜なんか群馬県のどっか高原地帯でタマネギが買い手がなかったらうーちやるとか、うーちやりにいったとかいっておりましたがね。ああいうところに行つて安く買って、大きな冷蔵庫にドカンと入れておいて夏あたりにそれを倉庫料、冷凍料ぐらいいでもうけないで売ればいいですね。また魚にしても鮭子あたりでサンマがうんと取れるとかあるいはイワシが取れたとか、アジがうんと取れたとかそういうときに買ってきて、大きな冷蔵庫にぶっこんで置いて、それを夏あたりにもうけないで実費だけ取って売るといふことになれば、これは下がるですね。しかしこれは固定する資金もいりますし、運営するということも業者にまかせなければならぬわけですし、なかなか思うようにいかぬと思いますが、やはりいろいろそういう機関を通じて検討しなければいけないと思います。

よそでは、千葉とかあるいは船橋のほうには小売りセンターストというものがあるそうですが、そういうものでもつくってやることも一つの手じゃないかと思うですね。小売りセンターストをつくって市でそういうものをつくって解放してやるという手もあるでしよ

うし、またいつか農協で直接販売をおやりになったですね。それは十字屋の野菜売り場で売ったわけですね。そうすると市場なんかから猛反対をくってしまつてそれをよしちやったんですね。

勝浦では朝市がございすね。農家の人は自分のつくつたものを持つてきて売る。漁師の方は自分でもつてきて朝市で売る。ああいうことも一つの方法じゃないかと思いますが、農協あたりはだいぶこの前ひどい目くつたようですが、なかなかこれはむずかしいことと思ひますけれども、やはりそういうことを実行するには理解と勇気がなければできないと思ひますね。

そういうことも一つの相場を安定させる一つのあれになると思ひますね。なかなかむずかしい話ですが、むずかしいからといって放置するわけには参らないわけですが、やはり流通機構の改善ということが大きく考えられると存じます。

いろいろ申し上げた小売りセンターも必要でしょうし、いろいろあるわけですが、これはなかなかいかに市といえどもいい名案がないわけですが、今の流通機構の改革とか、計画栽培ですか、野菜のほうはそういうことも必要ですし、鮮魚のほうは田村さんが先生だから田村さんにお聞きしなければわからないんですが、鮮魚のほうもなかなかむずかしいじゃないですか。魚の値段を下げるということはなかなかめんどろですね。いづれにしましてもめんどろだからといってうっちゃっておくわけにいきませんし、やるならば小売りセンター的のものをつくることも一つの方法でしょうし、卸売り市場ということもそういうことじゃないかと思ひますし、これといつていい方法がないわけですが、そういうようなことで進まなければならぬじゃないかと考えておるわけでご

ざいます。

それから、鮮魚商組合についてはあれは共同して魚屋さん方が共同して協同組合をつくつて、共同仕入れそういうこともやるんだそうですが、あれは県のほうが直接指導、助成してあるわけですが、市のほうとしてもそういうものができておることは、やっぱり私はいじやないかと思ひますね。別に大した助成も要請がございせんし、また今してももちろんおらないわけですが、やはり業者が共同してものをなるべく安く仕入れる。こういうことは私はいじやないか。そうして安く売る。組合のほうでは今でもそれでしょう。月に一回か二回品物を安く売る日を設けて売つておることがございすが、それらも物価安定にも役立つじゃないかと考えておりました、別に市が助成しておるといふこととございせんわけでございます。

どうも、田村さんの御質問にお答えができたかどうか知りませんが、まあお尋ねがあれば補足いたしますから、どうぞよろしく願ひます。

○助役（畠山 伝君）ただ今、市長からお答え申し上げましたが、その中で若干漏れるものがありますのでお答えいたします。

生鮮食料品の衛生の点でございす。これはやはり食品衛生法によりまして、直接には保健所の指導、監督下にあるわけでございます。これにつきましてもいろいろ不良食品の販売とかあるいは取り扱い等の面から消費者の苦情につきましては、苦情相談所でいろいろ承っております。

それから木更津の場合でございすが、木更津がきて館山がでないはずはないといふことでございすが、農林省はその上

の二十万以上それが農林省、木更津の場合は知事の認可の公設木更津は今人口七万か八万近くになると思いますが、この中に君津の一部を入れて知事の認可でやっておるわけでございます。したがしまして、館山だけでもできないはずはないというお言葉でございますけれども、先程申しましたように、鴨川地区を補充市場として考えた場合、やはり十六万をちょっと下回りまされども、県は大体その程度の規模でつくりたいということでございますので、市だけでどうか考えた場合にちょっと県のほうでも無理があるように聞いております。以上でございます。

〇二二番(田村源治郎君) 今市長がいわれたが、広域行政において市場をつくるんだ。総合市場だ。卸売り市場をつくるんだというのを助役が説明された。市長においては小売りセンター、小売りセンターというものは小売り商がたまつて市が一つの補助あるいは建物を建てて、そこに業者を鮮魚を十名とか五名とか、野菜は五名とか、食肉は五名とかをそこにに入れて販売をさせる。業者の競争をなしてはじめてだれが一つの食品として鮮度からみると、あるいは価格が一番いいものだということは消費者の目を通して販売していく。これが一つの安定策である。これは高くてもいいものはやはり値段がついておる。わるいものは買い手がいない。こういうところに小売りセンターとして東京都における千葉におけるものも市に直接そういうふうに建物を建てて小売りセンターというものをやっておる。これは農業者がじかに農産団体がそこに入れば、農産物のものもじかに売っていく。自分の価格をつけて消費者に見合わせた適当な価格をつけておるのが一つの安定である。

魚というものは館山市に上った。イワシばかり多く揚ったからといつても品目がない。サバが揚つてサバばかり毎日食つておるわけにはいかない。多く揚つて安くなるというのは品目が多く揚がる。みんなそんなに多く揚るわけではないんだ。イナダ、サワラ二百種類のものでそんなに揚るわけではない。サバばかり揚つたからといってサバを安く売って、安いからといってその魚を安く買うということとは物価対策ではない。

物価対策とは、物資が豊富に品目が集まつてそこに販売することとが結局物価安定の基礎をつくるのであつて、それなくして物価安定策とはいえないわけです。ないものが野菜により、鮮魚にしても自分の一つ卸売り市場をこさえるならば、そこに荷を引いてそこに物資も多く集まると。そこに人口に見合わせた供給を考えその適切な値段は自分たちの業者の卸業者が考えてつくるべきものであつて、これは中央から流れる農林省の市場が多く大体相場を持つ。東京、船橋、横浜、千葉この近辺でいうならば、その市場の相場に匹敵した量を、遠方の魚をひかなくちゃならぬ。また品目をひかなくちゃならぬという状態で、卸市場は特に必要である。同時に安くそれ売るといふことは小売りセンターというものは直結して必要である。そこには業者もまじることであるから市の積極的な補助、理解がなければこの物価の安定策は立てられない。市は積極的な援助、理解がひとつもない。市が積極的であるならば木更津市場あるいは安房郡行政面において必ずつくるといふ決心がなければおそらくつくり得ない。むずかしいとばかりいっていても、よそがやることができるものが館山市がやることができないわけがない。むずかしいというのは、もっと積極性がないことであ

って、同時に衛生面であるけれども、衛生面において食品衛生法というものがある。保健所ばかりにまかしてどうするんだ。

館山市において食品を扱うものは保健所まかせにして、市も積極的に食品法に違反しないようによく観察して、それを指導するのがあたりまえだ。伝染病、不良品あるいはいろいろのものがきいていると。これだけの館山市の住民に対して危険、不良あるいはいろいろな状態のものが食品にはくるんだ。それを保健所だけにまかせて、市は積極的に不良食料品を扱って伝染病がもしあった場合市が大きな負担しなければならない。大きなものを出さなければならぬ。それらの点はもっと合理的によく指導すべきではないか。それらの点は積極性がない。私はそう認めざるを得ない。食品衛生法というのはよく知っておるかどうか。館山市の魚屋がよく知っておるか。食品衛生法というのはどんなものか。

まして、私的市場においても食品衛生法を重んじてやっておる私的野菜市場というものはない。おそらく私的のものではあれは、私的市場の類似業、あれは市場とはいえない。市場だとしたならばこういうものをきちんとして歩合、いろいろの総合的のものである。あれはみんなよりあって、人が集まるから市場であって、市場という名前であって、あれは公然とした公共的の一つのものはないわけで、法的には何も触れないということでは衛生的のことは完備してない。ただ保健所だけ通ればそれでいいんだ。危険のものを売ろりか何を売ろりか関係ないんだ。いわゆる魚屋もそのとおりだ。野菜もそのとおりだ。館山市はこういう観点で強力にどういう施策を打ち出すかという点と、卸売り市場の建設か、小売り市場の建設を今後必ず検討してやるかやらないか。一つお聞

きしたいと思います。

○市長（本間 譲君） 先ほどお話ししましたが、市のほうでは積極性がないということはいわれましたけれども、今県のほうで人口十五万ぐらいいですか、ところに一カ所というような指定をするようなことになってくるわけですが、それに入らないと助成金やなんかがありませんので、それも近いうちだと思いますがそれが示されれば、大いにそれを早く実現を期していきたい。こういうふうに考えておるわけです。

それから、今衛生関係については市としてもお説のように、また法規上扱い得るものはこれからやって清潔のものを、新しいものを供給ができるようにやっていきたいと思っています。

○二番（田村源治郎君） 今、市長がいわれたけれども、県も市だって国から一つの補助がくる。県も国の補助を出して館山市に補助は出さなければならぬ。また広域行政でやればやっぱり補助をもらってやらなければならぬ。やっぱり積極性がなければならぬ。補助をくれるからではちょっと遅いんじゃないか。積極的に補助をもらう方法を市長は考えないのかどうか。積極的になる意志はないのか。補助をくれたらやりましょうでは、私たちの通告質問では価値がないものだから、市は積極的の同意を今後示すか示さないか。示すならこの点でもって質問を終りますけれども。

○市長（本間 譲君） このことにつきましては、去年、おとしから市場の業者を集めていろいろ話をしたんですが、あなた方が合併していただくことが先決だ。それにしては今の資本ではだめだ。両方で一千万円の資金をつくりなさい。そうして会社を充実

したものによってやれば、市は市で独自で考えようからというこ
とで話をやって、まだ打ち切ったわけでもないけれどもそういう
段階です。やりたいから、やろうとしてそれをかかったわけでご
ざいますが、今田村さんのお説のようにこれからも大いに促進を
して早くできるようにしたいと存ずるわけでございます。

〇二二番（田村源治郎君） 市長は積極的に卸売り市場の中には、
市の監督に株式会社一千万なり二千万なりで卸売り市場をつくる
意思は十分あり、積極的に進むことを約束できますね。積極的に
行動をとって。

〇市長（本間 譲君） それは、一千万というのは今の既設会社が
二軒あるでしょう。それらの今の形態では貧弱だからお互いに会
社を合併して、なお一千万の金をあんだ方はそろえなさい。ただ
会社ばかりあっても資金がないようなあれでは運営ができません
から、合併した上に一千万の金をつくりなさい。運営資金に。
こっちがつくるわけではない。むしろがつくるわけです。そうい
うことが確実にきまれば適当な場所に市場をつくってやろうとい
うことで話し合いができておるですね。税務署のほうのむこうの
ほうの原の中でやろうとして考えておるわけです。しかしなん
せ業者がなかなか長年張り合っておるからなかなかうまくいかな
いらしいですが、それはまともだと思いますが、なるべくこちら
から積極的に出て早くつくりたいと考えておりますから御了承願
います。

〇二二番（田村源治郎君） 質問を打ち切ります。

〇議長（吉田勇治郎君） 二二番議員の質問を終わります。

次、六番議員栗原一雄君御登壇願います。

（六番議員栗原一雄君登壇）（拍手）

〇六番（栗原一雄君） 館山市における自然を生かした観光シーズ
ンである夏も過ぎましたので、本年当初における施政方針の三本
の柱であります観光行政について御質問いたします。

一つ、観光開発の将来の具体的な計画について、もう一つです
が、将来における観光企業誘致の可能性についての、この二点に
ついて伺いたいします。

夏季における館山市は、自然に恵まれた県内においては最大の
海水浴場であり、風波による遊泳禁止はほとんどなく、それらに
伴う水の犠牲者も皆無であることは館山市民としても喜ぶもので
あります。

さて、東京を中心とした首都圏においては現在あらゆる産業が
産業廃棄物をまきちらし公害問題を引き起こしております。それ
らの悪環境の中に生活し、公害病に病める人々に自然環境に恵ま
れた南房総の地を時代の一つの要求として健康管理の場として提
供するべきではないか。このように考えるわけでございます。

わが国の産業は一大変革により近年急激な経済成長を上げて参
りましたが、産業構造の変化は労働時間を短縮し、その反面オー
トメ化による単調化あるいは精神的な緊張化によりまして、精神
的ないらだちを常に覚えるものであります。

これらに対応する生活環境の不備により予測できなかったあら
ゆる面においての公害、その他の問題点が発生し、人間生活を窮
屈にし自然を求める人々は増大いたしております。

東京を中心に産業の発展はめざましく京葉工業地帯さらには県
北に伸び、産業をささえる労働力人口は生産都市を中心にして集

まっております。当然必然的にこれに伴う管理機構、情報機構またその企業や労働者を対象に第三次産業である施設も相乗的に都市に集中し、都市人口は急激な膨張作用を始めております。

県の第四次総合五カ年計画は昭和五十二年において四百六十七万人、昭和五十五年では五百三十万人とする方針でありましたが、前回の長期計画による推計によれば昭和六十年に五百三十万人とする計画でありますので、この第四次計画はこの四次計画は五カ年の食い込みとなり、もちろん人口激増によるひずみの是正人口の抑制を基調に検討されておりますが、第三次計画が予想以上の人口増のため大幅な修正を迫られているようでございます。なお、新東京国際空港の開発に伴い一そりの拍車がかけられるものと思ひます。

さて、それらの生産年令者並びに家族の方々に人間疎外という現象が必然的に生じて参りましたので、それらの悪環境からのがれ人間性の回復、ストレスの解消を求めるべく、海洋風景がすぐれ気候温暖である館山市を首都圏のための観光レクリエーションゾーンとして、新鮮な空気を十分満悦できる環境整備を行ない自然と近代施設を提供することは、一つの需要と供給の原則であります。

一部企業においてはすでに週二日制を採用いたしております。

館山市においても週二日制について連協ニュースに問題が提起されておりましたが、これらの状況判断から考えますと、さらに保養と健康管理を兼ねたレジャー人口は増加するものと思われまふ。南房総地区における観光開発拠点として県が八億円を投じてつくった南房パラダイスが経営難から立ち直れず改廃の岐路にた

されていると、このように新聞も報道しております。昭和四十五年十月オープン時点においての計画では年間二十五万人以上の入場者がなければ採算ベースにのらないとされておりましたが、昭和四十六年度における南パラの入場者は十七万人であり、予定の約六八%という数字が示されております。

これにはもちろん一二七号線の改修工事の遅れ、バイパスの未解決の問題等もありますが、観光施設においては拠点としての一カ所では当然利用度は少なく、これに伴う複合施設がありますとさらに大きな相乗効果が生じてくるものと信じております。

現在の館山市内における民間企業による大型投資はむしろ少なく、城山、南房パラダイス等の公共施設による受け入れ体制では積極策を取ることとはむずかしく、これが四季観光の大きな伸び悩みであろうと考えられます。しかしながら民間企業だけに頼り過ぎてはこれは最も危険であります。これを野放しの場合にあへては無計画の開発になり目先だけの事情や一部の意見により場当りの、虫食いの乱雑な計画にならぬように、市としての基盤整備と環境保全を行ないながら、独自のパイロットプランにより指導し、観光開発を行なうべきであり、観光客に対する直接的なサービスは民間企業にまかせることにより、四季観光としての大きな飛躍が望めるものと思われまふ。

過日の新聞報道によれば八月二十一日通産省の音頭とりにより海洋開発協会が発足し、さらに建設、運輸、原生の各省が海洋レクリエーション基地の構想を立案発表いたしました。この政策が具体化されるならば当然民間企業に発注することになり、政府における試算額は投資額を二兆円を越えるものといわれております。

この施設の誘致を積極化し、自然環境に恵まれた館山市の個性を十分生かしたものとし、近代施設との調和をはかりながら若年層の所得を得られるような施設の増設をはかるならば、必然的に館山市を安住の地として生産年令層が集まり、豊かな財政基盤をつくり出すものであり、さらに市民サービスの窓口を拡大すること
も可能であろうと考えます。

以上をもちまして観光行政に対する質問といたします。

(市長本問 議員登壇)

○市長(本問 議員) 栗原さんの御質問に対してお答えをいたしたいと存じます。

観光問題は、おっしゃるとおり市政の大きな柱としてやっておりますわけでございます。観光問題は基本的には交通問題、道路の問題、受け入れ体制の問題とこの三つがそろいことが一番いいことと存じますが、その線にそっていろいろやっておるわけでございますが、館山市は御承知のように国定公園の中心地で非常に気候温暖で風景もよいところでございまして、おっしゃるように東京の都人士あるいは京葉工業地帯の方々のレクリエーション地帯としてばきわめて私は適当なところだと存ずるわけでございますが、まず交通問題につきましては三、四年前から運動しておりまして電化もおとすか完成し、さらに七月十五日から東京駅から特急電車が運転されるというようになりまして、大都会東京との時間が短縮され、しかも便利になった。こういうわけでございますが、それから一二七号線のバイパス線の建設でございますが、これについては昨年は調査費を建設省で五百万円ですが、盛っていたたくし、本年はこの実際の予算計上をする年でござい

まして、その点についていろいろ陳情しておりますが、まず一二七号線の早期実現について沿道町村において期成同盟会を新しくつくって運動しておるわけでございます。

さらに、千葉から君津の山間部を通過して白浜に至る山岳地帯の道路ですね。これは有料道路としていくと思いますが、大体航空機による道路の路線も通過箇所も大体きまっておりますが、これらも早期に実現をはかって参りたいと考えておりますが、さらにまだ私が別にどこでお願いしたわけでもございせんけれども今後の構想としては館山航空隊をヘリコプターだけだから、あそこはやはり将来は東京とか、伊豆とかをつなぐ航空基地ですか、これはできるかできないかわかりませんが、ひとつ聞いてみようと思います。そういう空からの航空網を考えなければならぬじゃないかと考えておるわけでございます。

それから、受け入れ体制につきましては、第一水の問題が一番大事なわけでございまして、この間西岬の西部水道を最後に、その前には富崎地区の南部水道、西岬水道それから三芳水道ですか、そういうものによって大体市の大部分のところには水道がいき届いたと、一番私は考えられた点は観光の最も主要な西岬地区が水道がなかったわけで、この間皆さんの御支援によりまして水道を引くことができました、これで基本的な受け入れ体制は大体まともになった。こういうことでございますが、今のお話は民間にまかせるといふことはどうかと思うようなことでございますが市が市費を投じて観光施設をつくるということとはなかなかこれは困難性があると思いますね。現在では城山公園、クジャク園等市費でやっておりますが、その他のものはやはり民間の人にまかせる

ということではなければならぬと思いますが、今のお話しの南房バラダイスのほうは欠損続きだというんですが、県が観光開発のために施設したものを、赤字だからどうのこうのというのは私は気がしれないですね。もうけべく県がそういうものをやるということとはどうもおかしいですね。自然にもうかっていくならいいけれども、もうからないからどうのこうの。そういうものをもうけべく公共団体がやるべきものではないと思いますね。

民間の人に頼めばもうからないければやりませんよ。しかしこれは当然ですけれども、公共団体しかも県がやる場合観光開発のためにやるから赤字だからどうのこうのということは、どうも私は合点がいかないですね。知事さんはどう考えているか知りませんが、あれができたことは成功ですね。あれをできた以上はもっと収益をあげるためにいろいろ考えておもしろいですが、つくっていただいたことは房州の観光上いいことです。今あのへんのゴルフ場とか、京成のゴルフ場とかゴルフ場二つでたくさんですが、これはけっこうだと思えますが、今いろいろ観光的にも申し出があるんですが、なかなかまとまらないですね。沖の島に海底水族館をつくるとか、二、三の業者いろいろ話があるんですが、なかなかうまくいきません。大きなことですね。十億とか二十億かけるというふれこみでしたが、なかなかうまくいきません。採算がうまくいかないということです。

今の中一の跡地、観光施設をという考え方でありまして、三社の業者が計画書を企画課のほうに出してあるようですが、いずれにしても市の資本で観光施設をすることは、なかなか館山市の財政では私はなかなかできない。やっぱり業者をお願いしてやるこ

とがいいと思いますが、今、西岬と神戸と富崎に国民休養村の施設を今やりつつあるわけでございますが、これも大きな政府の農林省の計画による施設ができるわけでございまして、これからも大きく観光のためになると思ひまして、市でも負担もございすけれども、これを大きく推進して参りたいと思ひますが、観光はやはり産業と結びついた観光、漁業観光、農業観光ですか、そういうようなことで、なるべく四季を通じてお客を迎えられるようにすべくやっておるわけでございますが、これはこれからの話になりますけれども、館山駅舎の改築のことを鉄道にお願いしようと思っておりますが、今の館山駅は海を背中にしよった駅舎で非常にあるいわけで、観光館山の駅舎としては適さないことだろうと思っております。これから鉄道に運動してあれは海のほうに出る口と駅舎の改築ですね、やろうということで地元あの付近の方々に非常に心配しておられますので、そういうことをやることも観光上大いに必要じゃないかと思ひますが、観光企業を誘致する上においては、やはり時代の要請の現在の緑地地帯の形をなくしないように、また公害の起こらないような観光施設をするということが基本的に考えられるわけでございまして、そういうことを考えて企業を誘致してそうしてやるんですが、私はやらなければ現在では館山市としてはできないと思ひますが、その線ですべておるわけでございすので、またよろしく御指導をお願いいたします。存するわけでございます。以上。

○六番（栗原一雄君）道路の問題は出たのでございますが、本年度は予算を本格化していくんだ。こういうようなお話してございます。これはもちろん一二七号線の問題だろうと思ひます。

現在の館山の観光道路をみますと、海岸線にずっと新しく市道として海岸道路ができておりますが、航空隊が一つのネックになっておるのじゃないか。私はあの広大な広い土地を航空隊が使っておるんですが、現在の国策としてそれを撤去しろ、どうのということじゃなくして、現在館山にありますので当然館山市に協力すべきだ。私はこのように考えます。

そういった意味であそこ鷹の島そして沖の島さらには笠名ですか、あそこに抜ける道路を設けるならば、やはり館山市は海が一つの大きな観光資源という考え方から考えるならば、どこからみても富士を中心にながめができるわけです。そういった観点から考えまして当然あの道路は非常に釣り、その他夏でもそうでございしますが、非常に利用度が高いという考え方から当然あそこを道路として早急に舗装あるいはもう少し基盤整備を行ないまして現在の夏だけの観光でもやはり道路整備をするならば、もともと利用度が高いのではないか。もちろん館山湾のいわゆる北条地区、館山地区よりも水がきれいだとされております。

そういった意味であそこに道路を設け、航空隊がいわゆる飛行計画にじゃまになるという考え方ならば、やはり沖の島から笠名ですか、あそこに抜ける道路、その他については地下道をつくるような考え方、防衛庁でそういったものを設けるような考え方をやはり防衛庁に要求することは、一つの館山市の大きな観光資源の生かし方ではなからうか、このように考えます。

それから、市長さんの答弁の中に公共問題云々いいとかわるいとかいってお話してございますが、決して私は悪いとは申しません。あれはすばらしい企画でございます。ただし民間でございすると、

やはり利益を一つの追求するという考え方で積極性があるわけです。私は先般剣道の大会にあそこに参りまして、たとえばゲームをさせていたきたい。このように申し上げましたら、もう時間ですと、それは半官民である公共施設の一つの運営の欠点だろうと思います。

やはり、一般の企業でございすると、もっと積極的にどうぞというところでやはり観光客に対する接客度もやはり公共の方たちよりも民間のほうが親切ではなからうか。そういった親切さで館山に行ったらまかーたということで二度、三度足を運ぶことになるうかと思えます。

それから、休養村の問題これは私大いに賛成でございます。しかしながら、これを多少前回の話しよりも縮小された、このように考えております。

それから、先ほど市長の答弁のうち、館山駅の改築ですが、これをよろしくひとつ積極的にお願いたしたいと思います。そういった意味で館山航空、防衛庁にそういった道路の設置要請をするかどうか、ひとつお答え願いたいと思います。

○市長（本間 譲君） 栗原さん、その問題は実はこういうわけだったんですよ。沖の島に水族館をつくと熱心にこられた方がおりましたときに、道路の問題いわれましたから、あそこをところを通って笠名に行く道がなければ困るということでいろいろやっただんですが、航空隊のほうとしてはどうもあのままではあぶないというですね。今お話しのように地下道ならばいいじゃないかと思っております。いろいろ実際企業をしている人ができたあかつきに企業家からも金を出してもらうことが必要じゃないかと思えます

が、まだそういうことが具体化しておりませんから、私もそれはあの道路を一本通すことはいいいことですよ。また通さなくてはいいけませんよ。そういうことでやる場合になつたら地下道ということじゃないかと思ひますがね。そういうことで考えております。

それから、南バです、時間外でどうのこのおっしゃられたそうですが、私はこう考えるですね。時間外というと、時間で職員は行っておりまから、時間をはつきりしてやらなければいけないからおっしゃったじゃないかと思ひます。それが直ちに不親切ということでもないと思ひます。職員というものは何時から何時まで勤務ということになっておりますから、そういうことも入つてくると延びちゃうじゃないでしょうか。そういうことでおっしゃったと思ひますが、私はわるく解釈しないほうがいいじゃないかと申し上げたいと思ひますが、今やへばり従業員というものは時間制で帰す時間に帰さなければいけないでしょうし、前にそういうふうに申し込んでおればどうか知りませんが、やはり親切を尽すことは一番大事なことです。観光地としてはこの点はよく考えてそういうことにならぬように指導して参りたいと思ひます。どうぞよろしく。

○六番(栗原一雄君) ただいまのお答えですが、公共施設のお答えですが、要旨の中に私は読み違えたかどうかわかりかねますが観光客に対する直接的な接客はこれは民間にまかすべきだ。しかし基盤整備をやる。市として無計画ではいかぬということを要旨の中に含めてありましたので、私は企業誘致は必要であらう。このように申し上げております。そういうことで市長さんの答弁と私とちよつと違つてございますので、そのように市長さん御理

解いただきたいと思ひます。

それから、先ほどにつなぎますが、航空隊の問題でございますが、本年度も沖の島に電話を設置しよう。電電公社のほうのひとつの好意によってこれだけのお客さまがくるんだから必要だろうというところで、ひとつ設置しようという案が出まして航空隊に申し上げたそうでございます。そうしますと、航空隊のほうではポールを建てられては困る。もちろん飛行計画の問題そういうじやまによる飛行機の危険ということだろうと思ひますが、やはり観光客に対する公衆電話の設置もある意味においては人命救助ということにつながつていくと思ひます。

そういう意味で現在極洋捕鯨でございますか、あれもポールを建ててはいけないということで、それでケーブルを使つておるそうでございます。しかしながら、そんなに私はじやまにならないと思ひますが、そういうことも積極的に道路の設置、その他によつてそういうものを解決をする。ポールぐらいの許可について市としてき然たる態度で折衝すべきではないか。このように考えるわけがあります。これからそういう問題について、航空隊のほうにお話ししていただけるかどうか。もう一度お答えいただきたいと思ひます。

○市長(本間 譲君) それはなんです、夏だけ電話を引きたいとおっしゃつたわけですね。そして道路が航空隊だから航空隊で断わられたんです、どうなんですか。道路は市が借りておるですからね。あそこに至る道路は航空隊だけじゃないと思ひますね。そんなやかましいことをいったですか。引いちゃいけないというやうな、どうですか。

○六番（栗原一雄君） これは私は事実でございます。先ほどもう一度確認しましたら電話のことについてはボールはいけないという話があったそうでございます。

○市長（本間 譲君） 市のほうにいていただければ、また骨を折ってそれは人命救助いろんな面からしてやっぱり必要ですね。夏季でもある。それはこちらのほうでやりましょうよ。

○六番（栗原一雄君） それから観光問題でございます。当然私はお尋ね申し上げておりますのは、こういう具体的な計画でございますので、どうしてやったらいいかということなんですが、それとまた合わせて現在の汐入川でございますが、夏の間はヘドロが干潮時に熱に熱せられますのでかさぶたのようににはがれてしまします。満潮時になるとそれが浮いて、干潮時に海に流れ込む。非常にきたない。非常にみても見苦しい状態でございます。そういう九問題でございますが、もちろん県の重要河川ということで県が当然管理すべきだろうと思いますが、もう少し積極的にあの河川のヘドロの撤去、昨年においては二中の下までやったようにでございますが、まだまだそういう九問題が解決できておらないと思いますので、その点を県、その他にこのような要望をして解決していただくのも、館山市の大きな観光の財源を生かすことになるのではなからうか。このように考えます。

これから、そういう意味で県のほうに強力に要請していただきたい。このように考えます。

○市長（本間 譲君） 栗原さん、それは去年第一回やりましたね。引き続きやることで今年も予算がついておるんですよ。これは夏が終わってからやることになっておると思いますが、それはずっ

とやることになっておりますから、きれいにしていただくことであれば始まったわけですから、継続事業としてきれいになるまでやってくれると思います。またこちらから申し入れたいと思います。

○六番（栗原一雄君） それから、やはりもう一度企業誘致の問題ですが、館山市は大きな企業というものはございませんので、約一般財源の四分の一の経費をかけた教育でございます。これは私は、こと教育でございますのでまことにけっこうだと思えますが、やはりある程度の企業がございします。そういう優秀な人材を育てながら、全部いわゆる頭脳流出という形で館山市から出て行ってしまふ。優秀な人材をそれだけの経費をかけるならば館山市に当然残して地元のために働いていただくということを考えなければいけないと思います。

そういうことで、やはり企業誘致それだけの優秀な若年層の働けるそして所得の得られる場所を積極的に誘致しなければならぬ。そのように考えますので、その誘致のことについて先ほど市長からある程度御答弁いただいたんですが、そういう可能性は、きりもう一度お答えいただきたいと思ひます。

○市長（本間 譲君） 現在においては塩見ですが、あそこに三菱かなんかにヨットハーバーをつくるということで推奨してあるようですが、うまくいかないようですが、これも市が関係してありませんが、そういう問題もありますし、市にすればこの間どうも反対されたからあの連中はわけがわからないということとまずいと思つて、業者がやっておるらしいと思ひますが、これも企業誘致ということでもないけれども、誘致でもあるわけですが、なか

なかりまいかないようですが、それから今、一中の跡地を処分してあそこに観光施設をつくらうということで三、四社いろいろ計画を出しておりますから、観光につながる公害のない企業誘致をしよう。その人に地所を買ってもらいたい。こういうことではありますが、とにかくこれはなかなか一かり誘致ということとはなかなかできないですが、やはり観光のこと、ホテルとか遊園地とかいろんなことになりましたが、なかなか思いついてやるほかないんですが、あれば検討していいことであればそれに協力してやる。こういうことでなかなかこちらから積極的に頼みにいくようなこともできないし、とにかくいろいろ計画がきまいますから、それを検討していいものは助成してやろう。そうして観光企業の誘致をしようという考えですが、その他なかなかこちらから積極的にやるというようなこともできないわけですが、今のところはそういう考え方であるわけですが、またいいのがあったらおっしゃってほしいと思います。

○六番（栗原一雄君） 最近東京湾も非常に汚染されておりまして、CODと申しますか、科学的酸素要求量というものが最近では汚染によって非常に変化しております。そういったことで最近の新聞をみますと、いわゆる東京湾死の海だ。生物が非常に少なくなっておりますというふうな報道もされております。

そういったことで、館山市の将来の生活を安定させる意味で観光産業にもっていく。あるいは観光農業にもっていくか。あるいはそういった観光消費者を相手に館山市が一つの生活の基盤にしていくかということを、やはり大きな積極的な姿勢をもってやらなければならないと申し上げますのは、館山市は観光、観光と申

し上げて本年の観光祭りにおいては六月二十八日でございますか、それから全体会議というのは七月二十七日にやっております。おそらくきょうは反省会というようにことが新聞にちょっとのつておったと思いますが、やはり観光祭りをやるならば、市の積極的なリーダーシップという形で積極的な姿勢でもう少し事前に、たとえば反省会の終わった時点でもうすでに来年度の計画をするような姿勢があつて必要ではなからうか。どうもどろなわ式で一月ぐらい前ぐらいに予定を組むというような形では、やはり観光としての町づくりは非常に困難ではなからうか。このように考えますのでどうか積極的な姿勢で行政指導をしていただくというところで私の質問を打ち切りしたいと思います。

敬

会 午後三時四十一分散会

○議長（吉田勇治郎君） 以上により通告者による一般質問を終ります。

次会は、明九月十二日午前十時開会といたします。その議事はかねて説明の終了しました各案件の内容審議を行ないます。

○本日の会議に付した事件
一、行政一般質問

